貝塚市埋蔵文化財調査報告　第68集

新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要2

2007.9.30

貝塚市教育委員会

はじめに

大阪府南部に位置する貝塚市は、南は和泉山脈に接し、北は大阪湾に面しており変化に富んだ自然環境が残されています。

新井・鳥羽北遺跡は、小瀬、半田、新井地区に広がる中世・近世の集落跡であります。遺跡範囲の大部分はユニチカ㈱貝塚工場にかかります。ユニチカ㈱と言えば、東京オリンピックバレーボール「東洋の魔女」を輩出したことで有名ですが、平成９年に操業を停止し工場跡地は新たな活用方法が計画され工場から店舗へと急速に変貌をとげています。

今回の調査では、掘立柱建物跡を発見し、集落域の一部が明らかとなり、中世から工場造成に至るまでの土地利用の変遷が明らかとなりました。

これらの成果は、本市ならびに周辺地域の歴史を明らかにするうえで、まことに有意義なことと考えています。

本調査報告書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成19年9月30日

貝塚市教育委員会

教育長　山本　太三郎

例　　言

1．本書は、ユニチカ株式会社　代表取締役　平井雅英からに小瀬175-1他地内（開発面積39,669㎡）所在する新井・鳥羽北遺跡において実施した、店舗建設工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は確認調査を平成14年10月15日～10月31日、２次発掘調査を平成15年4月7日～平成15年10月20日にかけて実施した。なお内業調査については本書刊行をもって終了した。

3．調査にあたっては、ユニチカ株式会社ならびに株式会社橋本興業に多大な御理解と御協力を得た。ここに記して、感謝の意を表します。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員三浦基が担当した。
内業調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。
馬場美也子、遠山法城、飯島卓哉、岡本恵子、畑中道子

5．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P．）を基準とした。

6．本書の土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1993年度版を用いた。

7．本書の執筆・編集は三浦が行った。

8．遺物写真撮影は三浦が行った。

9．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　　調査に至る経過 …… 1

第２章　　位置と環境 …… 3

第３章　　調査結果 …… 4

１．調査の概要 …… 4

２．基本層序 …… 4

３．検出遺構 …… 5
第１区 …… 5
第２区 …… 14

４．出土遺物 …… 17

第４章　　まとめ …… 24

図版目次

図版表紙　写真１：第2区全景、
図版１　検出遺構　第1区
写真２：第１区全景、写真３：SD－106、写真４：池２
図版２　検出遺構　第1区
写真５・６：池１堤、写真７：鋤溝、写真８：SD－73・74、写真９：SD－96、写真10・11：SD－98、写真12：SD－106
図版３　検出遺構　第1区
写真13～15：SD－41、写真16：SD－30、SD－31、SD－95、写真17：SD－41、写真18：SD－96、写真19：SD－92、池１堤
図版４　検出遺構　第1区、第2区
写真21～24：SD－106、写真25：SD－92、写真26・27：SD－98、SX－329
図版５　検出遺構　第2区
写真28・29：建物a、写真30：SX－329、写真31：SE－331、写真32～34：SD－98
図版６　検出遺構　第2区
写真35・36：SD－164、SD－165、写真37：建物b・c、SD－503、写真38：鋤溝、写真39・40：SD－503
写真41・42：SD－369
図版７　検出遺構　第2区
写真43：第2区東側、写真44・45：建物b、写真46・47：建物ｃ
図版８　出土遺物　SX－27、遺物包含層第4層、第3層、SX－500、SD－503出土土器
図版９　出土遺物　SD－503、SD－98、ミニチュア羽釜、Pit－196、Pit－459、Pit－523、Pit－432出土土器
図版10 出土遺物　SD－69、Pit－476、遺物包含層第4層、表採、出土石器

挿図目次

図１　貝塚市位置図
図２　貝塚市遺跡分布図（部分）
図３　調査地位置図
図４　調査区・地区割図
図５　柱状土層図
図６　遺構配置図
図７　池４（SX－99）平・断面図
図８　SD－41、SD－44、SD－98、SD－106断面図
図９　SX－1～SX－4、SX－16、SX－21、SX－22～SX－26、SX－34、SX－35平・断面図
図10　SX－121、SX－122平・断面図
図11　第２区　東側　遺構配置図（部分）
図12　建物ａ平・断面図
図13　建物ｂ、建物ｃ平・断面図
図14　SE－331平・断面図
図15　SX－27、SD－96出土土器
図16　I区遺物包含層第4層、第3層出土土器
図17　SX－232、SX－465、SX－478、SX－482、SX－500、SD－515、SX－518出土土器
図18　SD－503出土土器
図19　SD－98出土土器
図20　ミニチュア羽釜
図21　Pit－196、Pit－459、Pit－523出土土器
図22　Pit－432出土土器
図23　II区遺物包含層第4層出土土器Pit－432出土遺物
図24　遺物包含層第3層出土瓦
図25　SX－465、SX－478、SD－503、Pit－525出土瓦
図26　SD－69、Pit－476遺物包含層第4層、表採、出土石器

第１章　調査に至る経過

ユニチカ株式会社　代表取締役　平井雅英から小瀬 175-1 他地内（開発面積 39,669㎡）で店舗建設の計画がもちあがり、敷地が新井・鳥羽北遺跡の範囲にかかるため平成 14 年 8 月 27 日に発掘届出書が提出された。

発掘届出書の提出を受けて確認調査計画を作成し、平成 14 年 10 月 15 日～ 10 月 31 日確認調査を実施した。11 ヵ所で合計約 620㎡の調査を実施した結果、古代～中世とみられる溝、柱穴等の遺構、遺物包含層が存在することが判明した。

この結果により、遺跡範囲が広がることが明らかとなり遺跡発見届出書の提出を求めた。また、開発工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ部分約 14,000㎡（店舗建設部分）で発掘調査が必要という結果により、発掘調査の協議を行い、平成 15 年 3 月 13 日覚書を交わし、調査を実施した。

発掘調査期間は、平成 15 年 4 月 7 日～平成 15 年 10 月 20 日にかけてである。広範囲の調査となるため 2 分割（第 1 区、第 2 区）し、実施した。

遺構の検出状況などから調査範囲の拡張を行った部分がある一方、工場建物が残る部分や工場及び水路で破壊されている部分は、調査範囲から除いたため、最終的な調査面積は 12,600㎡となった。内業調査は、平成 15 年 12 月 8 日～平成 16 年 3 月 31 日にかけて実施した。

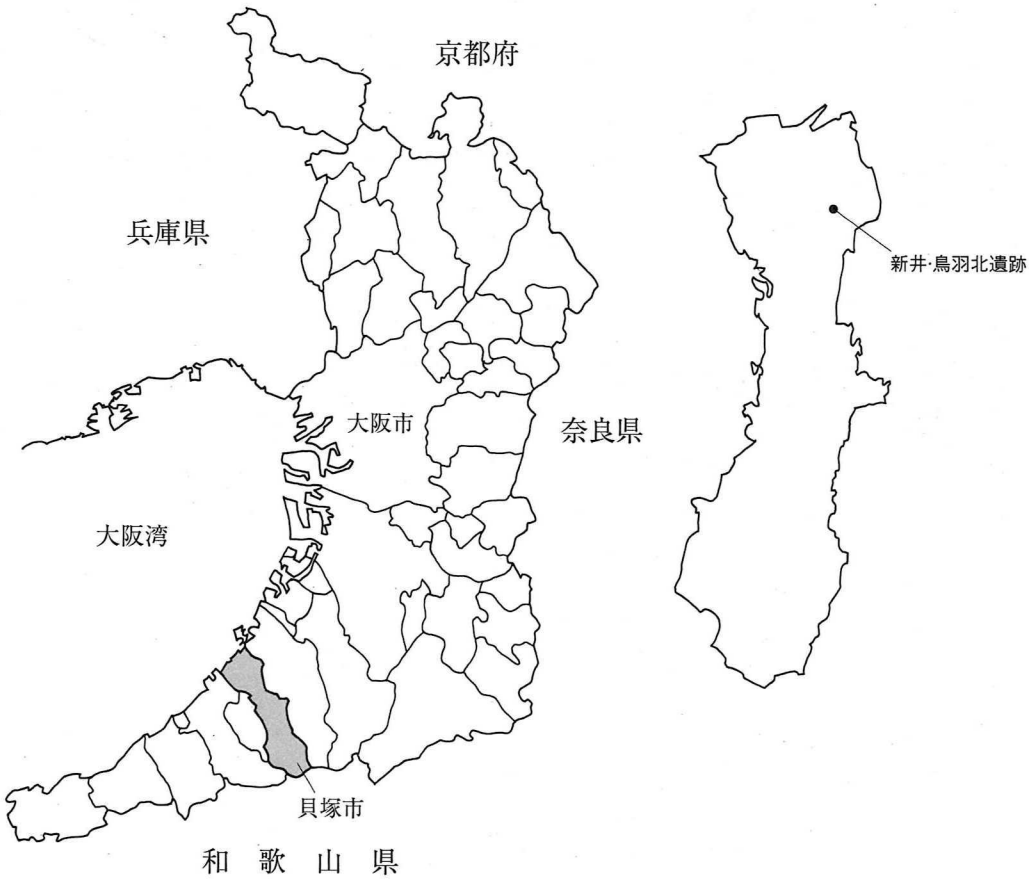
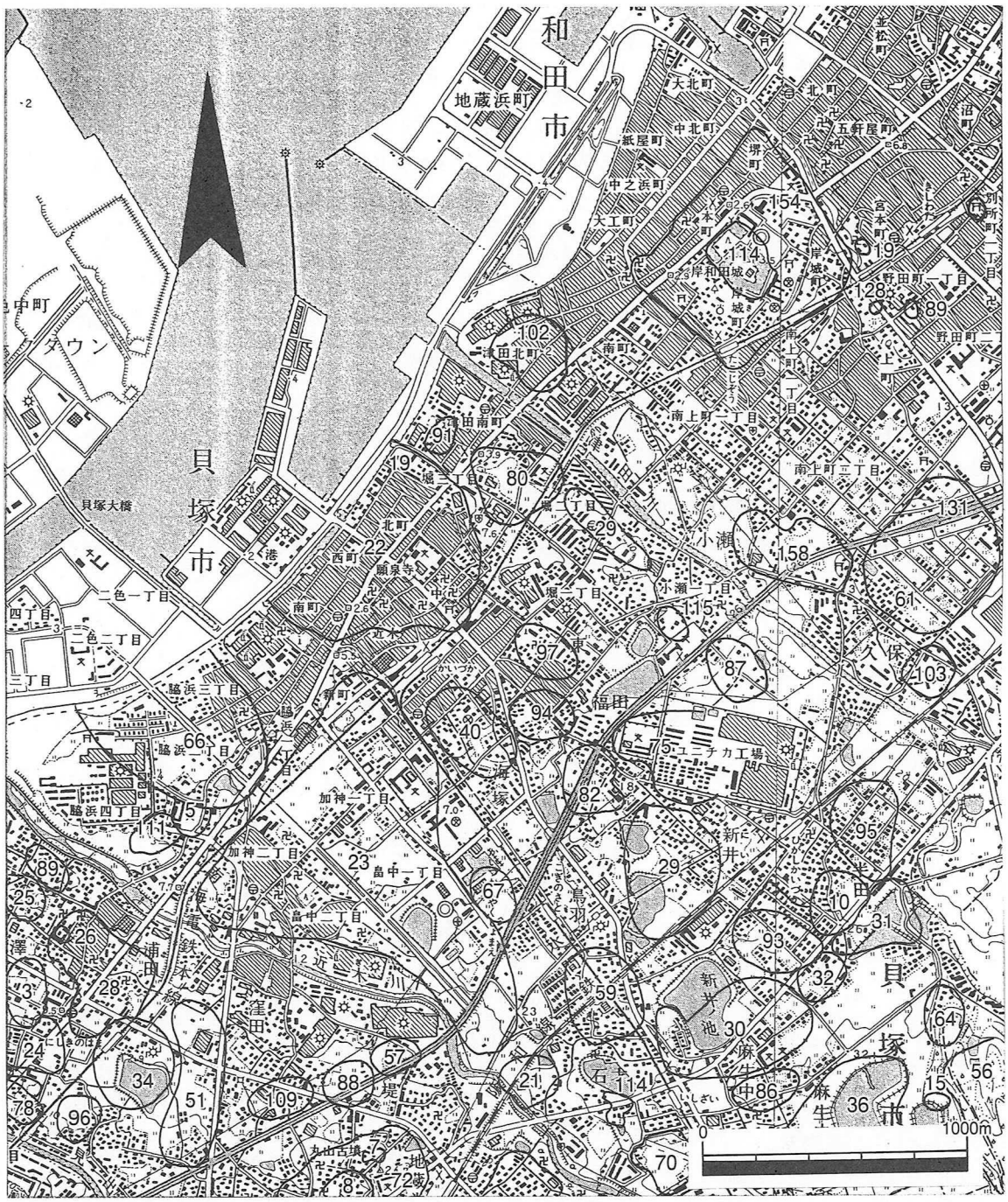


図１　貝塚市位置図



5 長楽寺跡　7（国史跡）地蔵堂丸山古墳　8 地蔵堂廃寺　10 秦廃寺　15 麻生中新池遺跡　19（貝塚）泉州麻生塩壺出土地　20 堀遺跡　21 橋本遺跡　22 貝塚寺内町遺跡　23 加治・神前・畠中遺跡　24 明楽寺跡　26 沢西出遺跡　28 沢城跡　29 新井・鳥羽遺跡　30 新井ノ池遺跡　31 半田遺跡　32 麻生中遺跡　34 澱池遺跡　35 積善寺城跡　36 清児遺跡　51 窪田遺跡・窪田廃寺　55 槍ヶ谷城跡　56 半田遺跡（清児地区）　57 堤遺跡　58 小瀬五所山遺跡　59 石才遺跡　61（貝塚）土生遺跡　64 海岸寺山遺跡　66 脇浜遺跡　67 今池遺跡　70 石才南遺跡　72 地蔵堂遺跡　75 新井・鳥羽北遺跡　80 津田遺跡　82 福田遺跡　86 麻生中出口遺跡　87 小瀬遺跡　88 堤三宅遺跡　89 沢新開遺跡　91 堀新遺跡　93 麻生中下代遺跡　94 堀秋毛遺跡　95 半田北遺跡　96 沢老ノ塚遺跡　97 東遺跡　102 津田北遺跡　103 久保遺跡　109 窪田ハマデ遺跡　110 海塚遺跡　111 脇浜川端遺跡　114 麻生中薬師堂遺跡　115 谷池遺跡

19（岸和田）宮本町遺跡　89 岸和田古城跡　114（府指定史跡）岸和田城　126 沼天神社遺跡　128 小寺遺跡　131（岸和田）土生遺跡　154 岸和田城遺跡

図２　貝塚市遺跡分布図（部分）

第２章　位置と環境

調査を実施したのは貝塚市北西部に位置する新井・鳥羽北遺跡である

本遺跡は、貝塚市北部を流れる津田川左岸の段丘上に位置し、東西約 350 m、南北約 320 mの範囲に広がる中世から近世にかけての集落跡である。遺跡の範囲は大部分がユニチカ貝塚工場跡地の敷地にかかっており標高約 17 m～ 20 mである。

周辺に散在する遺跡としては、北に弥生時代～古墳時代・中世の散布地・集落跡である小瀬五所山遺跡、弥生～古墳時代の集落跡である土生遺跡、東に弥生～古墳時代の散布地・集落跡である半田遺跡、西に中世～近世にかけて繁栄をみせた貝塚寺内町遺跡、南には新井・鳥羽遺跡、弥生時代の集落跡と考えられる新井ノ池遺跡、古墳時代～中世にかけての集落跡である加治・神前・畠中遺跡などが存在する。

ユニチカ貝塚工場は、昭和９（1934）年に工場の造成が開始され、田畑が工場に姿をかえた。従前の調査から工場造成に伴って大規模な盛土が行われ、工場建設時の基礎掘削等により破壊されている部分があることが明らかとなっている。工場は平成９（1997）年操業を停止し 60 年余りの歴史の幕をとじた。

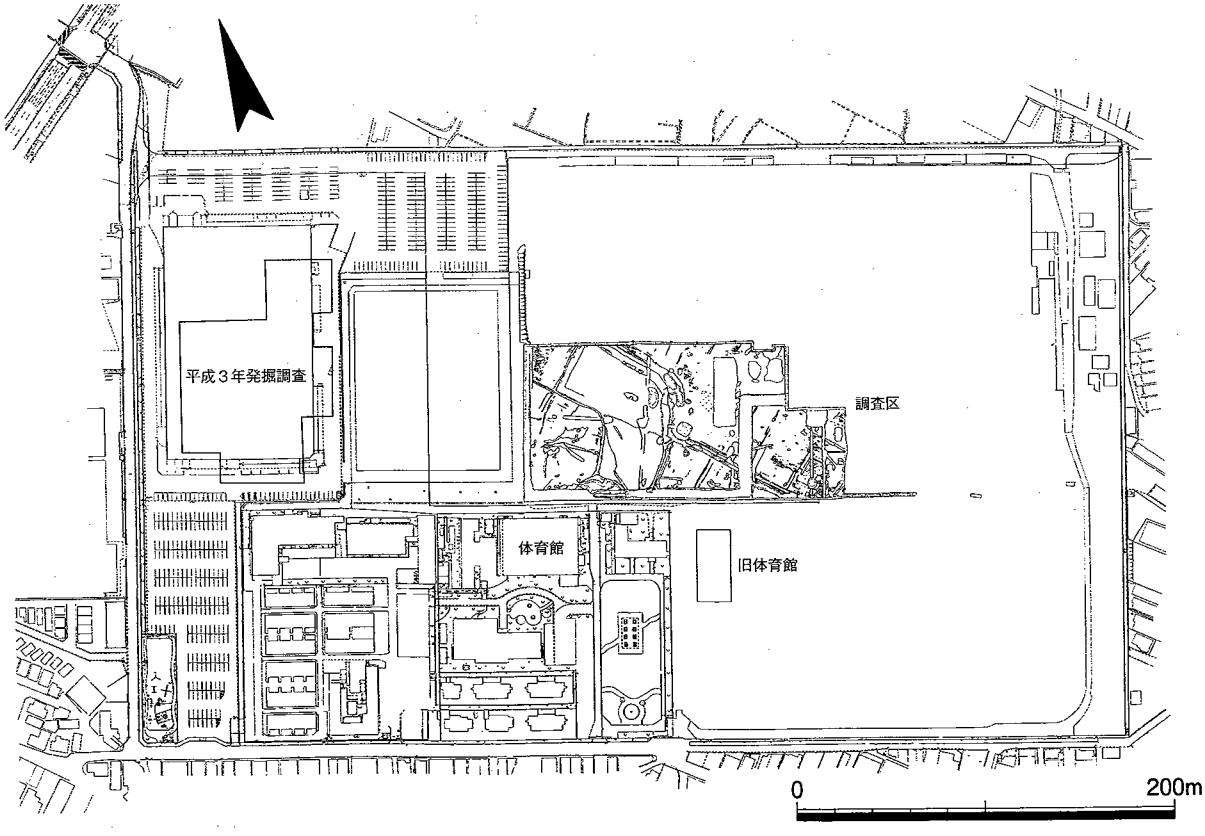


図３　調査地位置図

第３章　調査結果

１．調査の概要

調査は、店舗建物建設により破壊を受ける部分（約 12,600㎡）について調査区を設定した。調査範囲が広いため調査区を２分割し、第１区、第２区とした。調査区は国家座標 X = -172600、Y = -57990 を基準にして 10 m × 10 mの区画を設け、東西方向に 18 区画（1 ～ 18）、南北方向に 12 区画（A ～ L）を設定した。

調査は、第１区は確認調査の結果から判断して確認調査における遺物包含層第２層～第４層を機械で掘削し、遺物包含層第５層上面で遺構検出を実施した。

第２区は、遺物包含層第５層の見られない範囲が広かったため、遺物包含層第２層～第５層を機械で掘削し、地山上面にて遺構検出を実施した。

遺構は、調査区の一部で後世の攪乱を受けている部分も存在したが、第１区、第２区ともに良好に検出しており、鋤溝を中心として溝、柱穴、土坑等を検出した。

２．基本層序（図５）

調査区は工場敷地内に位置する。工場敷地は大きく分けて工場とグラウンドに分けることができる。第１区のほとんどがグラウンド部分で、第２区はグラウンドの東側から工場部分である。工場部分とグラウンド部分の境には段差があり、グラウンド部分が約１m低くなっている。工場部分、グラウンド部分はそれぞれ平坦であり、調査区全体が広範囲に盛土により造成されている状況が確認できた。本遺跡における従前の調査では中世以前の流路、石組みを伴う段差が広範囲に見られ多様な地形変化を確認している。以下、各地層について上層より概要を示す。

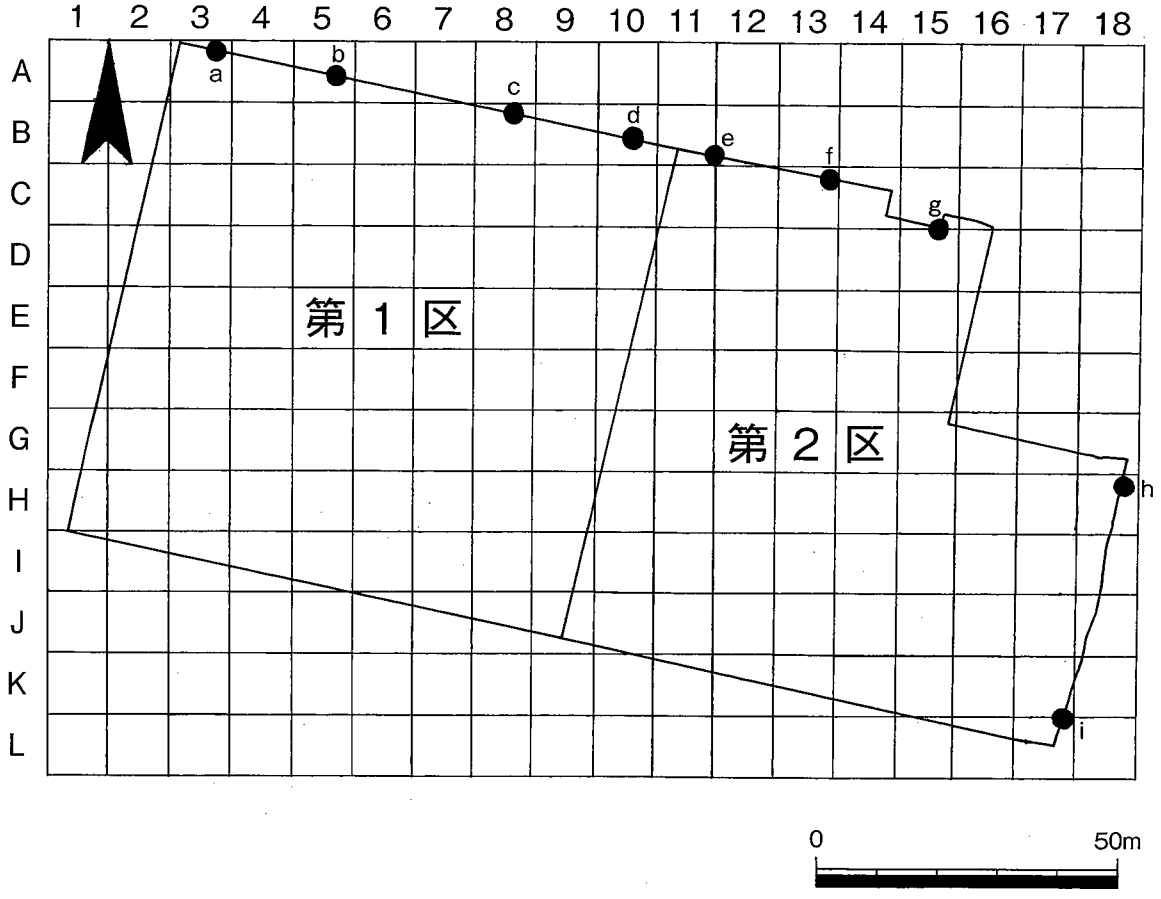


図４　調査区・地区割図

第１層は盛土である。調査区全域でされており、層厚 0.7 ～ 1.7 mである。昭和９年に工場の敷地として造成する際に行なわれたと考えられる。盛土は礫、砂を多く含む状況から近くを流れる津田川の周辺から採取したものと考えられる。

第２層は耕作土で、ほぼ全域で確認しており、層厚 0.1 m～ 0.2 mである。造成に際して耕作土除去は行われておらず直接盛土を搬入し造成を行っている。また、一部造成に際して耕作土を地盤の低い方向に移動している状況を確認している。

第３層は、黄褐色細砂混じり土（2.5Y5/3）で層厚 0.1 ～ 0.3 mである。遺物は瓦器椀、近世陶磁器を含む。中世～近世の遺物包含層と考えられる。

第４層は、灰黄褐色土（10YR4/2）で層厚 0.1 ～ 0.2 mである。遺物は瓦器、土師器などが含まれ、中世の遺物包含層と考えられる。

第５層は、黒褐色土（10YR2/2）で層厚 0.1 ～ 0.15 mである。遺物は瓦器、土師器などの中世の遺物、中世以前の遺物が少量含まれる。第５層は第１区では広範囲に確認でき、第５層上面で遺構検出を実施したが、第２区では存在しない部分も見られた。

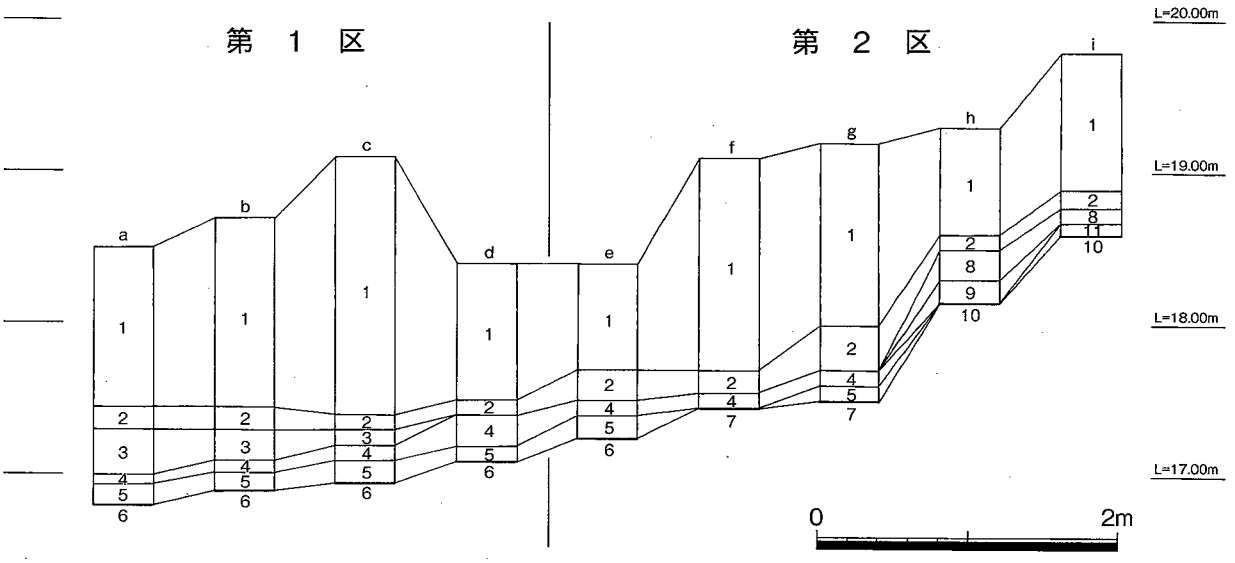
第６層は、地山で灰黄色土（2.5Y7/2）、暗灰黄色礫混じり土（2.5Y5/2）、明黄褐色粘土（2.5Y7/6）である。第２区は地山上面にて遺構検出を実施した。地山面は標高 17.8 m～ 18.6 mで、南東から北西方向に緩やかに下っており、流路や旧河川と考えられる部分は確認できなかった。

３．検出遺構（図６・７）

各調査区ともに地山上面にて遺構検出を実施した。第１区は、広範囲に地山が削り取られている状況であった。第２区は、工場関係の配管、基礎等により広範囲に破壊をうけている部分が存在した。各調査区について概要を示す。

第１区

本調査区では、溝、鋤溝群、池３基などの耕作に伴う遺構を多数検出した。調査区南側では地層が削り取られ



1．盛土
2．耕作土
3．黄褐色細砂混じり土（2.5Y5/3）
4．灰褐色土（10YR5/2）
5．黒褐色土（10YR2/2）
6．灰黄色土（2.5Y7/2）地山土
7．暗灰黄色礫混じり土（2.5Y4/2）
8．黄褐色細砂混じり土（2.5Y5/3）
9．黄褐色粘質土（2.5Y5/3）
10．明黄褐色粘土（2.5Y7/6）地山土
11．灰黄褐色土（10YR5/2）

図５　柱状土層図

ており遺物包含層、遺構の上層が削り取られている状況を確認した。以下、主な遺構について概要を示す。

ＳＤ－９８

本遺構は、第２区から本調査区方向（南東－北西）に流れる溝である。幅 1.2 ～ 1.5 m、深さ 1.2 mである。埋土の状況から、工場造成時に埋められた灌漑水路と考えられる。遺物は、瓦、陶磁器が出土した。

ＳＤ－４１

本遺構は、調査区南側から中央部で北西方向に曲折し流れる溝である。幅 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mで耕作地段差部分につくられている。遺物は陶磁器、瓦器が出土している。

ＳＤ－１０６

本遺構は、調査区南側から中央部で北西方向に曲折し流れる溝である。幅 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mで耕作地段差部分につくられている。遺物は陶磁器、瓦器が出土している。

池１

本遺構は、調査区北側で検出した池である。規模は、長軸約 60 m、短軸約 25 m、堤の幅３～４ mである。地字図では「新池」となっており、明治期の地図に記載はない。もともと地形が低く、SD － 98 などの水路が集まってくる場所であることから池状になっていた部分に堤を設けて池としたと考えられる。池の造成時期は明治時代後半から大正時代にかけての間と推測される。埋め戻しの時期は、埋土の状況から判断して、工場造成時に埋められたと考えられる。遺物は出土していない。

池２（ＳＸ－２７）

本遺構はＨ－４、Ｈ－５、Ｈ－６、Ｉ－４、Ｉ－５、Ｉ－６にて検出した池である。池の南側は管埋設時に破壊されており全体の規模は不明であるが、検出長 18.5 m、検出幅 9.1 mである。埋土は灰色粘土～砂礫で深さ 1.17 mである。埋土の状況から判断して自然に埋没したものと考えられる。遺物は瓦、陶磁器が出土しており、近世後半以降に掘削されたと考えられる。

池３（ＳＸ－４７２）

本遺構は、調査区東端で検出した池である。直径７ m、深さ約３ mの耕作に伴うものと考えられる。埋土の状況から自然に埋没したものと考えられる。遺物は、瓦、陶磁器が出土しており、近世後半以降に掘削されたと考えられる。

池４（ＳＸ－９９）

本遺構は、第１区と第２区の境目で検出した池である。6.5 m × 6.5 mの隅丸方形で深さ 1.3 mである。耕作に伴うものと考えられる。埋土の状況から判断して自然に埋没したと考えられる。遺物は瓦が出土しており、近世後半以降に掘削されたものと考えられる。

鋤溝群

本遺構は調査区北西部分で検出した鋤溝である。南西－北東方向とそれに直交する方向のものがある。幅 0.15 ～ 0.2 mで遺物は瓦器、土師器が出土しており、中世の耕作に伴うものと考えられる。

ＳＸ－１

本遺構は、Ｇ－２区にて検出した土坑である。長さ 1.76 m、幅 0.96 mで埋土は灰褐色土で、深さ 0.19 ～ 0.34

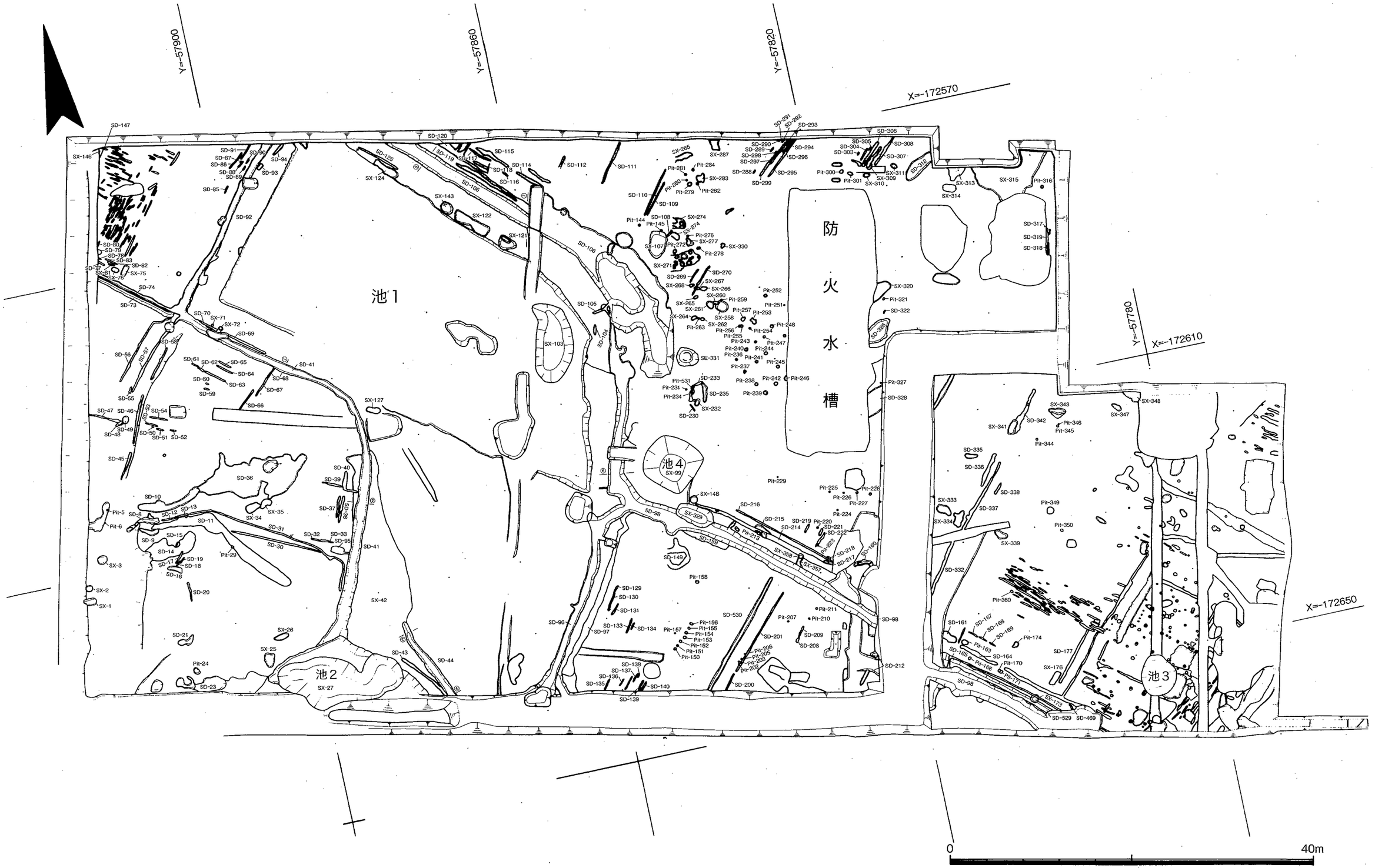

Y=-57900
Y=-57860
Y=-57820
X=-172570
Y=-57780
X=-172610
X=-172650
池1
池2
池3
池4
防火水槽
0
40m

図６　遺構配置図

mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－２

本遺構は、Ｇ－２区にて検出した土坑である。長軸 0.94 m、短軸 0.86 mである。埋土は灰褐色土で深さ 0.1 mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－３

本遺構はＦ－２区にて検出した土坑である。長軸 1.34 m、短軸 1.2 mである。埋土は灰褐色土で深さ 0.24 mである。遺物は出土していない。

ＳＤ－４

本遺構はＦ－２区にて検出した溝である。遺構上面が削りとられており溝の深い部分が残ったものと考えられる。検出長 4.28 m、幅 1.96 m、深さ 0.09 ～ 0.2 mで埋土は灰褐色土である。埋土は周辺の他の遺構と同じである。遺物は出土していない。

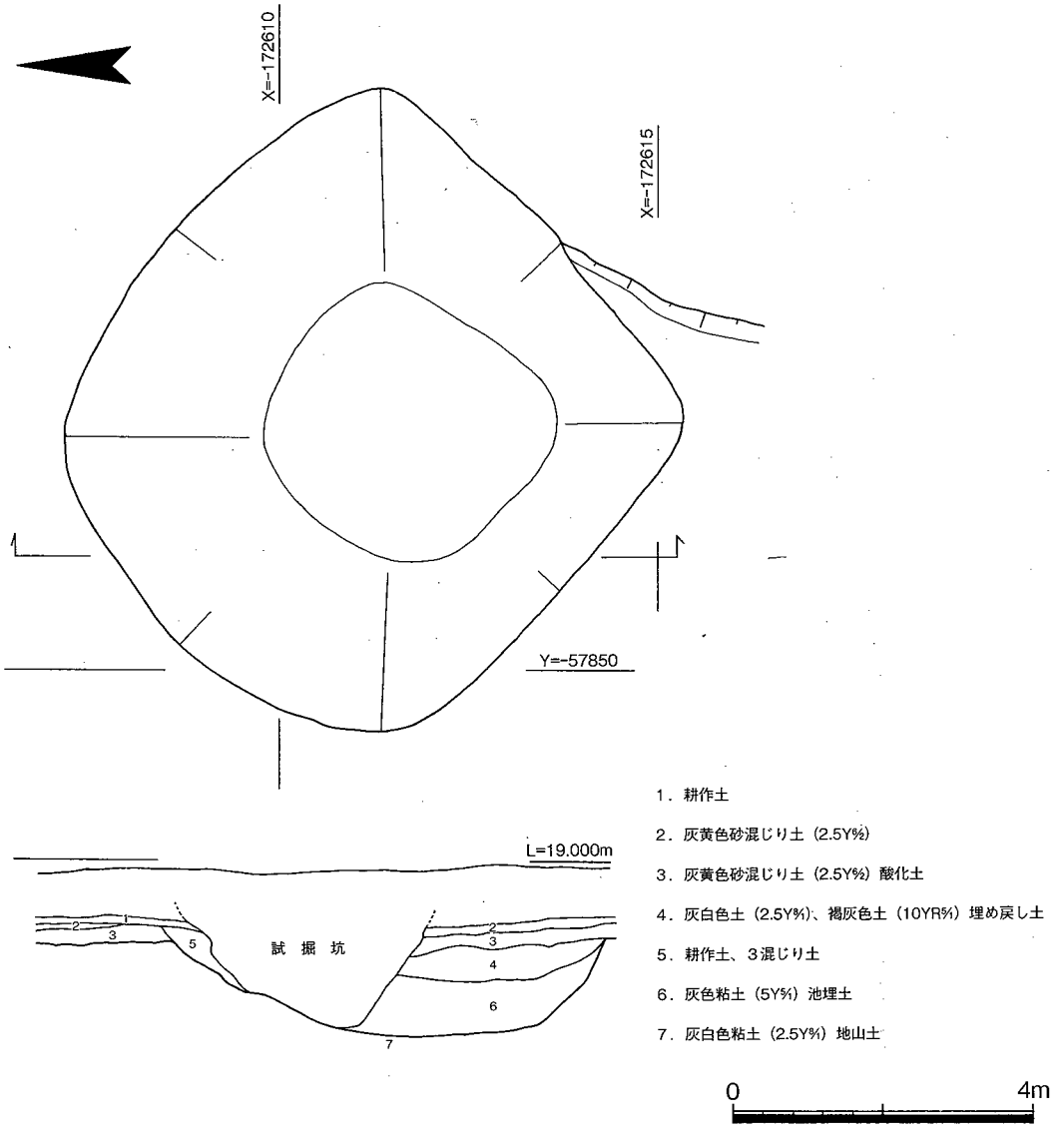
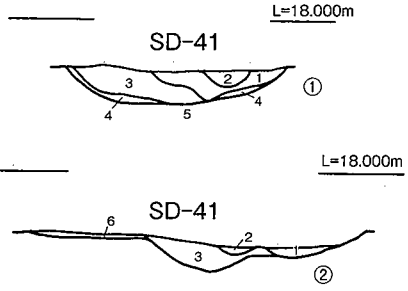
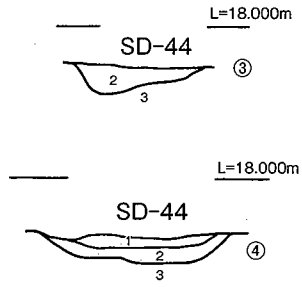


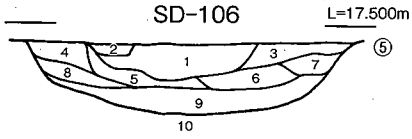
図７　池４（SX-99）



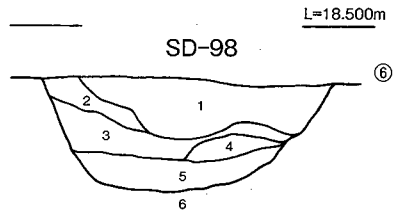
1．灰色砂（5Y⅘）
2．灰オリーブ色砂（5Y⅚）
3．黄灰色土（2.5Y⅘）、灰色砂混じり
4．黄灰色土（2.5Y⅘）
5．灰黄色土（2.5Y⅚）地山土
6．灰黄色砂（2.5Y⅚）



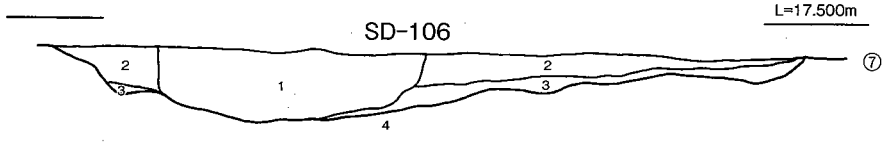
1．灰黄色砂混じり土（2.5Y⅚）
2．灰黄色土（2.5Y⅚）
3．にぶい黄色土（2.5Y⅝）礫混じり土　地山土



1．灰オリーブ色極細砂～粗砂礫（5Y⅝）
2．灰オリーブ色極細砂（5Y⅚）
3．灰黄色細砂（2.5Y⅚）
4．灰色極細砂（7.5Y⅘）
5．オリーブ黄色細砂（7.5Y⅝）
6．黄褐色粗砂（2.5Y⅝）
7．灰色砂混じり土（7.5Y⅘）
8．４・５混じり土
9．灰オリーブ色砂（5Y⅝）
10．灰色砂混じり土（7.5Y⅘）地山土



1．浅黄色極細砂～粗砂礫（2.5Y⅞）
2．暗灰黄色粘質土（2.5Y⅝）
3．暗灰黄色土、粗砂混じり（2.5Y⅝）
4．黄褐色細砂（2.5Y⅝）
5．３・５混じり（7.5Y⅝）
6．暗灰黄色土（2.5Y⅝）地山土



1．にぶい黄色粗砂、礫混じり（2.5Y⅝）
2．暗灰黄色土（2.5Y⅝）
3．にぶい黄色砂（2.5Y⅝）、灰黄色土（2.5Y⅝）混じり
4．灰黄色土（2.5Y⅝）地山土

0　2m

図８　SD-41、SD-44、SD-98、SD-106　断面図

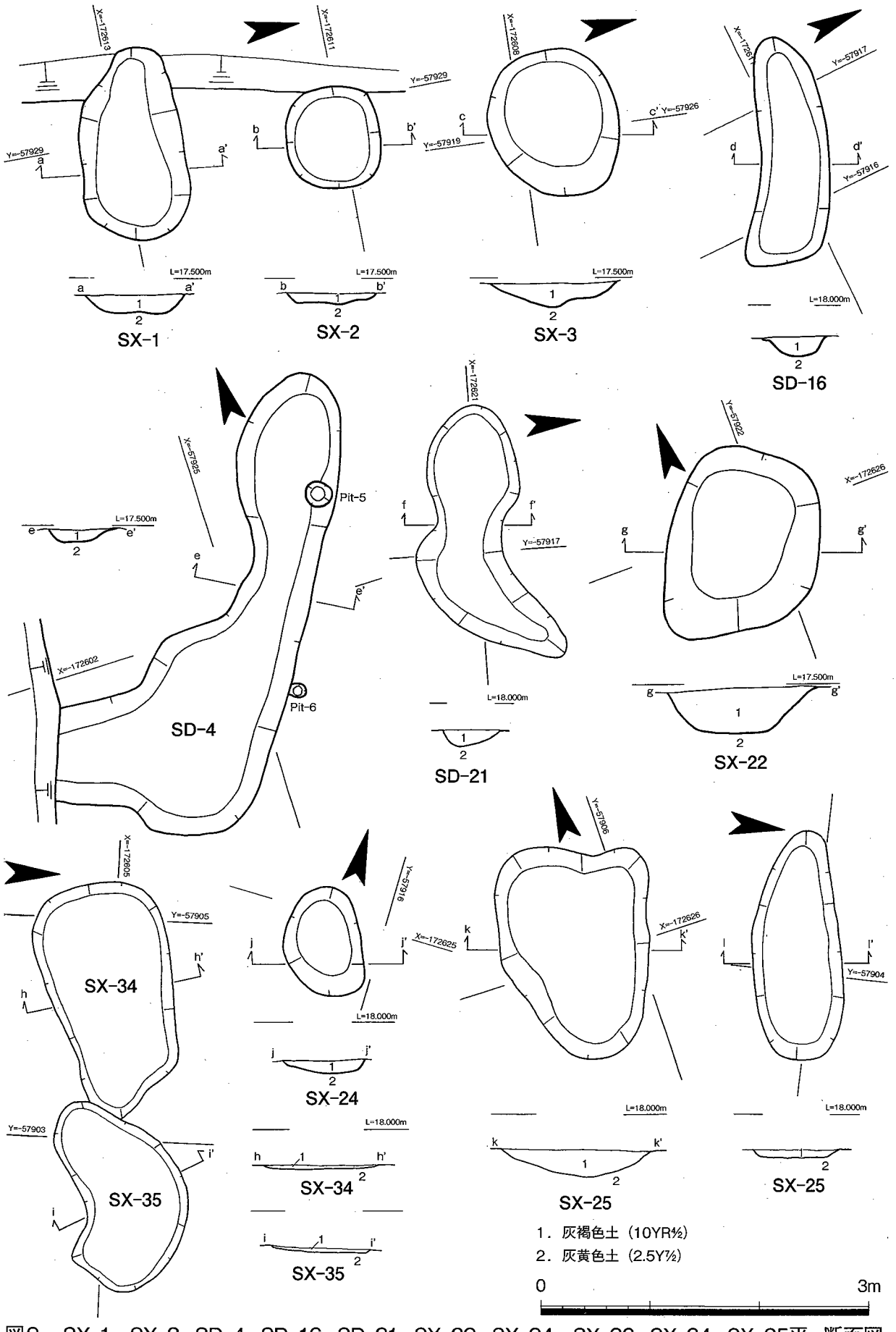


図9　SX-1～SX-3、SD-4、SD-16、SD-21、SX-22、SX-24～SX-26、SX-34、SX-35平・断面図

ＳＤ－１６

本遺構はＧ－３区にて検出した溝である。長さ 2.1 m、幅 0.68 mで埋土は灰褐色土である。深さ 0.08 ～ 0.15 mで遺物は出土していない。

ＳＤ－２１

本遺構はＨ－３区にて検出した溝である。長さ 2.44 m、幅 0.84 mで、埋土は灰褐色土である。深さ 0.09 ～ 0.24 mで遺物は出土していない。

ＳＸ－２２

本遺構はＨ－２区にて検出した土坑である。長さ 1.76 m、幅 1.38 mで埋土は灰褐色土である。深さ 0.13 ～ 0.35 mで遺物は出土していない。

ＳＸ－２４

本遺構はＨ－３区にて検出した土坑である。長さ 1.0 m、幅 0.72 mで埋土は灰褐色土である。深さ 0.11 ～ 0.13 mで遺物は出土していない。

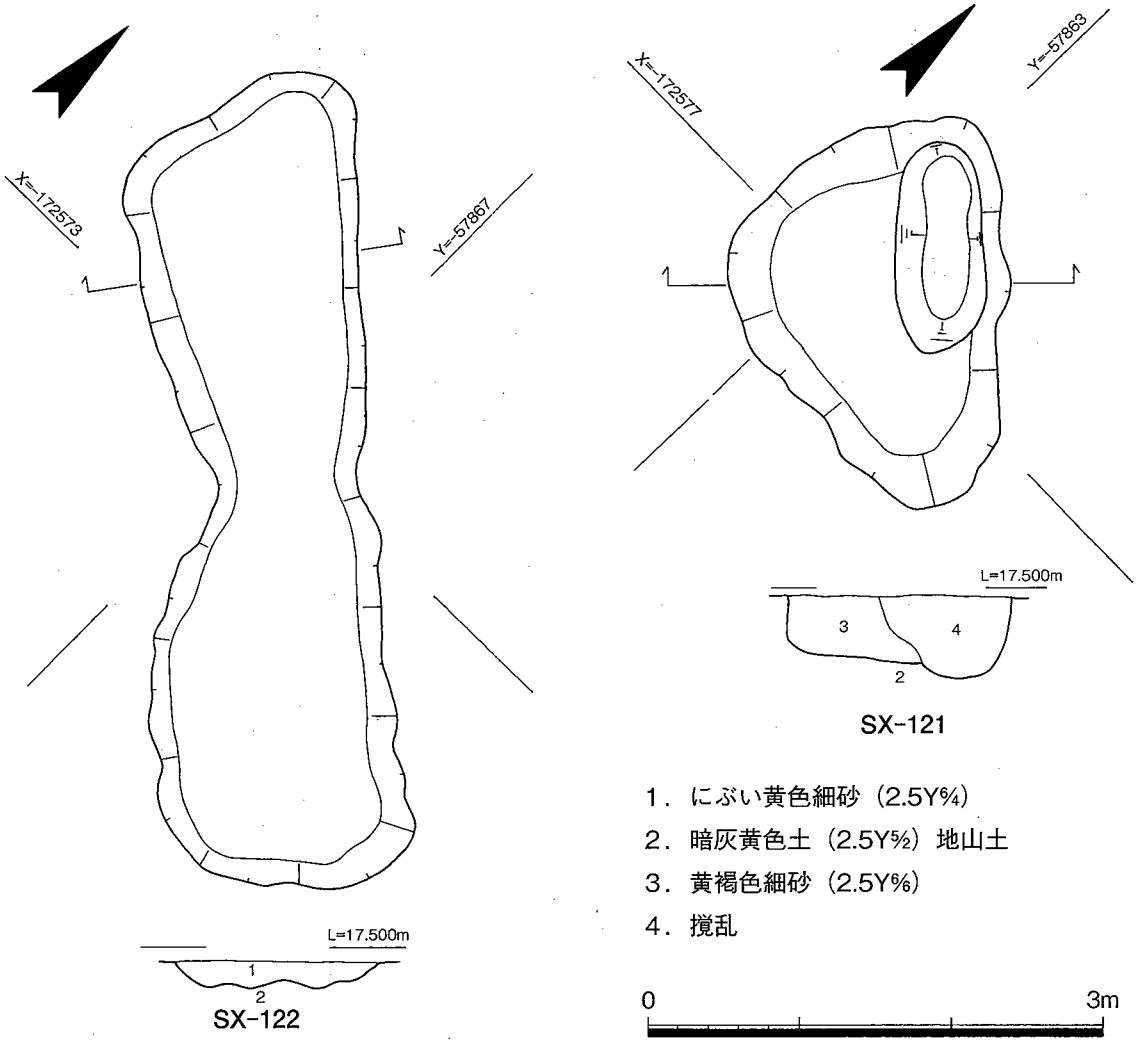


図10　SX-121、SX-122平・断面図

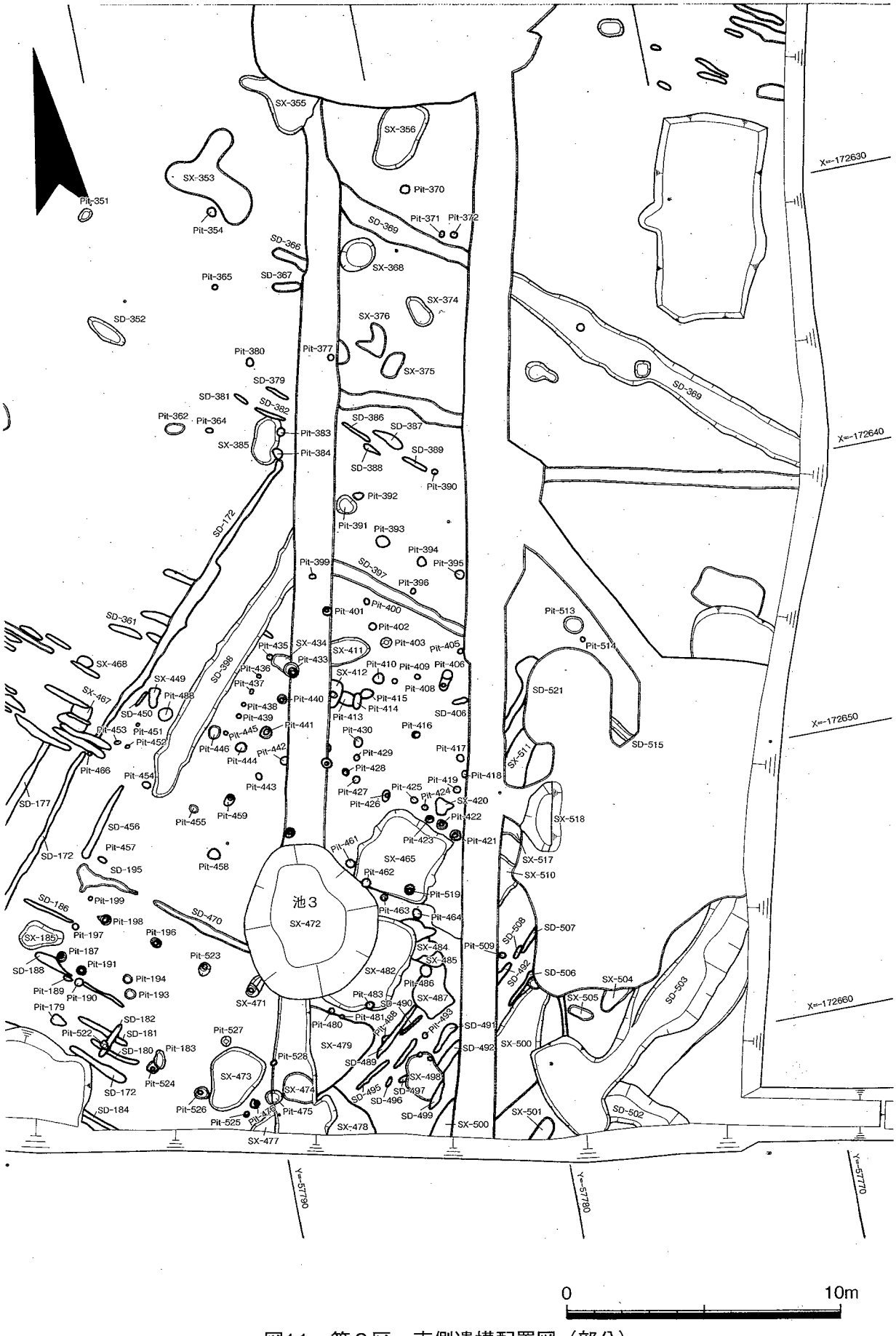


図11　第２区　東側遺構配置図（部分）

ＳＸ－２５

本遺構はＨ－４区にて検出した土坑である。長さ 1.9 m、幅 1.38 mで埋土は灰褐色土である。深さ 0.16～0.27 mで遺物は出土していない。

ＳＸ－２６

本遺構はＨ－４区にて検出した土坑である。長さ 2.1 m、幅 0.78 mで埋土は灰褐色土である。深さ 0.1 mで遺物は出土していない。

ＳＸ－３４

本遺構はＦ－４区にて検出した土坑である。長さ 2.65 m、幅 1.18 mで、埋土は灰褐色土である。深さ 0.03～0.11 mで遺物は出土していない。

ＳＸ－３５

本遺構はＦ－４区にて検出した土坑である。長さ 1.8 m、幅 0.94 mで埋土は灰褐色土である。深さ 0.05 mで遺物は出土していない。

ＳＸ－１２１

本遺構はＣ－８区にて検出した土坑である。長さ 2.54 m、幅 1.84 mで埋土は、にぶい黄色細砂（2.5Y6/4）で深さ 0.45～0.62 mである。遺物は出土していない。SX-121、SX-122 は池の堤部分に位置すると考えられ、埋土は、砂が入る状況である。池の築造により以前に存在した溝の底部分が残ったものが本土坑と考えられる。

ＳＸ－１２２

本遺構はＣ－８区にて検出した土坑である。長さ 5.35 m、幅 1.62 mで、埋土は黄褐色細砂（2.5Y6/6）で深さ 0.15～0.21 mである。遺物は出土していない。

第２区

本調査区では、掘立柱建物３棟、柱穴、土坑などの集落に伴う遺構、溝、井戸、鋤溝群、池１基などの耕作に伴う遺構を検出した。調査区南東部分は、あまり削平を受けていない部分であり良好な状態で遺構を検出することができた。以下、主な遺構について概要を示す。

建物ａ（Pit-236～Pit-246）

本遺構は調査区西側で検出した掘立柱建物である。南東－北西方向で４ｍ×６ｍ（２間×３間）の建物である。柱穴から遺物は出土していないが、中世の時期の建物と考えられる。

建物ｂ（Pit-401、403、407、414、416、422、426、432、433、441、459、460、461、512、519）

本遺構は調査区東南部で検出した掘立柱建物である。

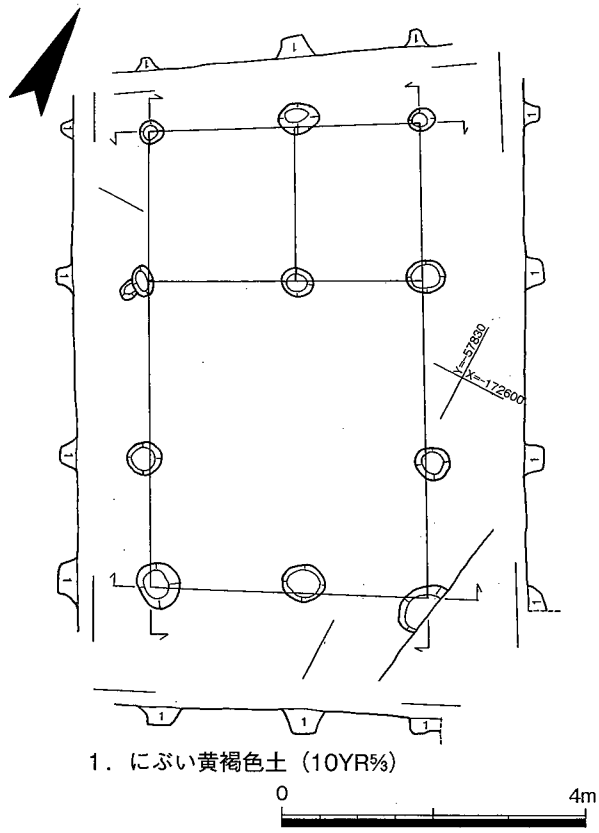
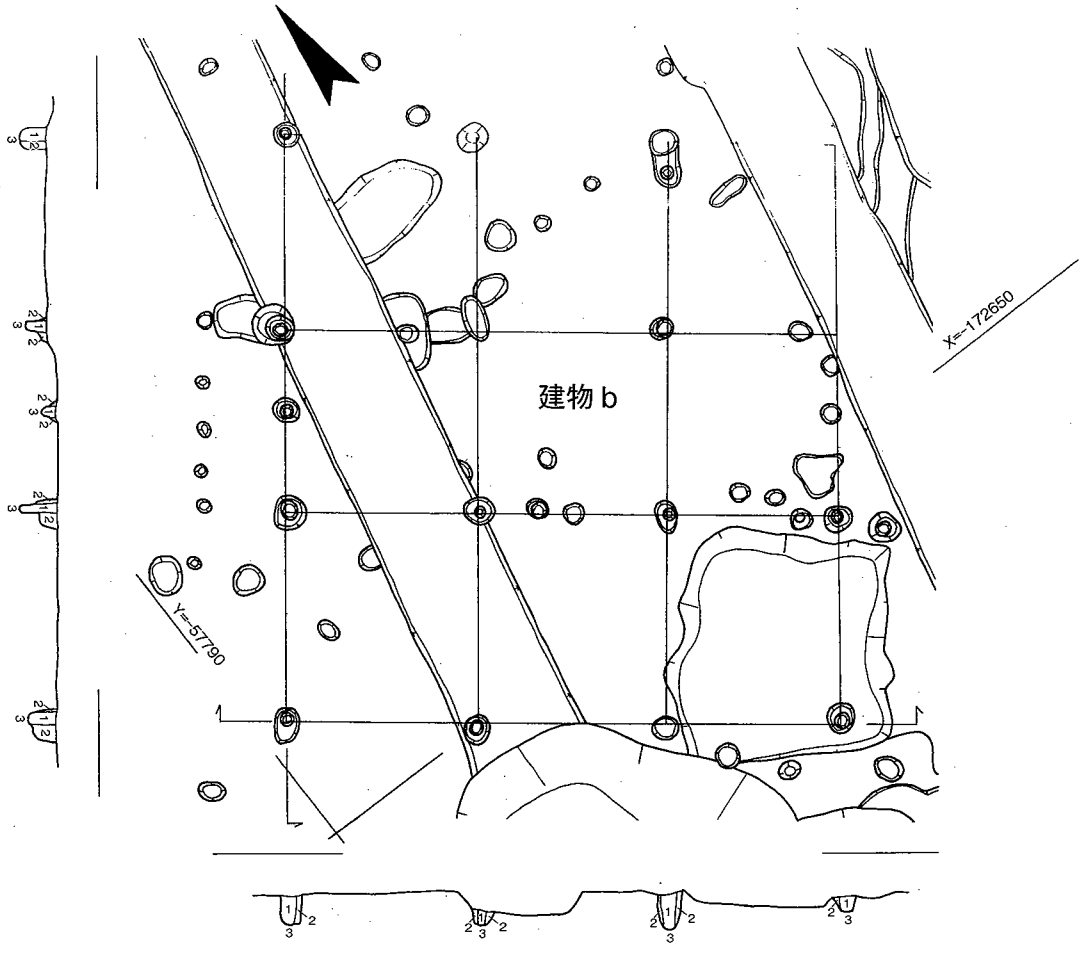
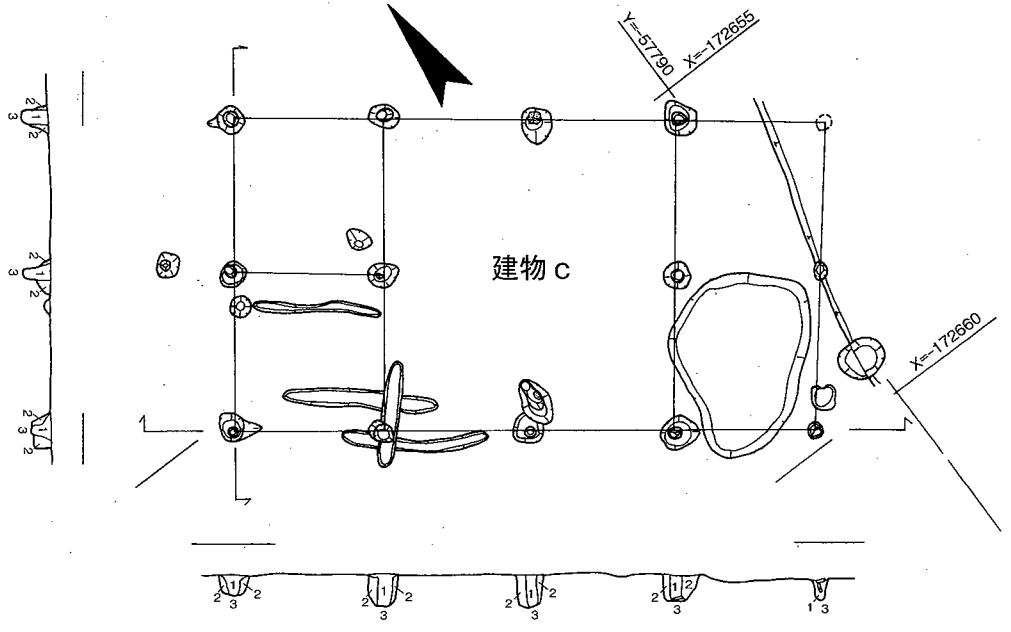


図12　建物a平・断面図





1．にぶい黄褐色土（10YR5/3）

2．にぶい黄褐色土（10YR5/3）、黄色粘土ブロック混じり

3．明黄褐色粘土（2.5Y6/6）地山土

0　5m

図13　建物b、建物c平・断面図

7.5 m × 7.5 m（3 間 × 3 間）の建物である。柱穴の規模は直径 0.2 ～ 0.4 mで埋土は灰黄色砂質土、柱穴内から土師器、瓦器、青磁が出土しており、中世の時期の建物と考えられる。

建物 c

本遺構は調査区東南部で検出した掘立柱建物である。4 m × 6 m（2 間 × 3 間）の南東部分に庇がつく建物である。柱穴の規模は直径 0.15 ～ 0.4 mで埋土は灰黄色砂質土、柱穴内から土師器、瓦器、瓦が出土しており、中世の時期の建物と考えられる。

溝３（ＳＤ－５０３）

本遺構は調査区南東部で検出した溝である。幅２m、深さ0.3 mの規模で、北東－南西方向に流れる。建物 b、建物 c と建物周辺の溝と方向が同じで区画溝の可能性がある。遺物は瓦器、土師器、青磁、瓦が出土しており中世に掘削されたと考えられる。

鋤溝群

本遺構は調査区東側で検出した鋤溝である。南東－北西方向で幅 0.1 ～ 0.2 mである。遺物は瓦器、土師器が出土しており、中世の時期のものと考えられる。

池５

本遺構は、調査区東南部で検出した池である。長軸５m、短軸４m、深さ約３mの耕作に伴うものと考えられる。埋土の状況から自然に埋没したものと考えられる。遺物は、瓦、陶磁器が出土しており、近世後半以降に掘削されたと考えられる。

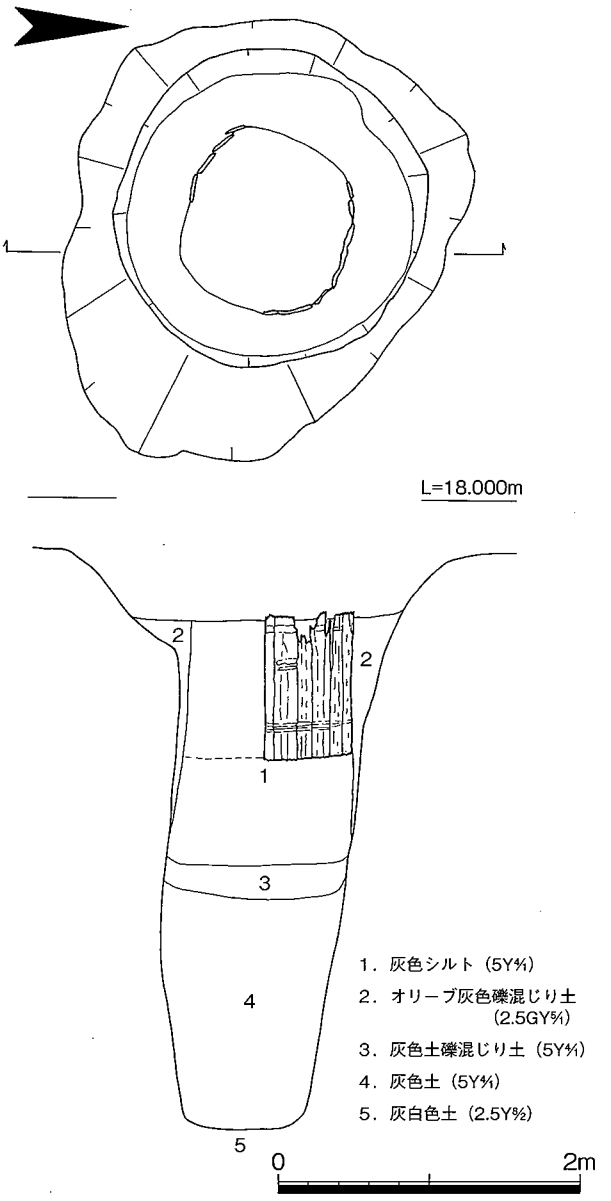


図14　SE-331平・断面図

井戸（SE － 331）

本遺構は区にて検出した井戸である。長軸 3.1 m、短軸 2.5 mの楕円形である。上層部分で高さ１m、直径 1.1 mの桶を井戸枠としている。井戸枠以下は石組み等はなく素掘りで深さ 3.85 mである。埋土は４層に分けられ、井戸埋土第３、第４層は自然に埋没したと考えられ、第１層は埋め戻しを行なったと考えられる。井戸内からは土器等の遺物は出土しておらず、壊れた梯子の一部が出土している。時期は埋土の状況や桶の状況から判断して近世末から近代にかけての掘削と考えられ、井戸の主用途も耕作に伴うものと考えられる。

４．出土遺物

第１区

ＳＸ－２７

３～５は磁器染付である。３は復元高台径3.9cmの碗である。４は復元高台径4.7cmの碗である。外面に草花文を描く。内面見込み部は釉はぎである。５は復元口径17.2cmの鉢である。外面にみじん唐草文、内面に格子目等の文様を描く。

ＳＤ－９６

１は復元高台径4.2cmの陶器碗である。高台は削りだしで、内面に釉薬を施す。２は、復元高台径5.0cmの京焼風陶器碗である。外面に呉須で文様を描く。

遺物包含層第４層

６は復元口径14.4cmの土師質土器皿である。外面に指押さえを施す。７は復元口径16.6cmの白磁碗である。内、外面に文様を施す。８は復元高台径4.1cmの磁器碗である。９は復元高台径3.6cmの磁器染付碗である。外面に草花文を描く。内面見込み部は釉ハギである。

遺物包含層第３層

10は復元口径7.6cmの磁器染付筒形碗である。外面に幾何学的な文様、内面口縁部に格子目を描く。11は復元高台径5.6cmの蓋付碗である。高台部に２条の横線、外面に文様を描き、内面見込み部に文様を描く。12は高台径8.5cmの磁器染付皿である。高台は蛇の目釉ハギ、畳付けで内面に文様を描く。

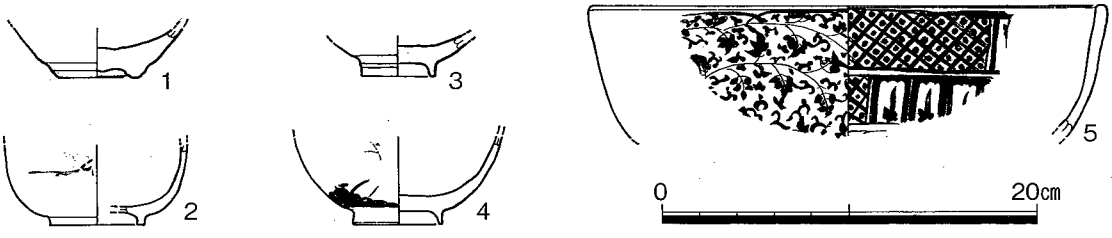


図15　SX－27（３～５）、SD－96（１、２）出土土器

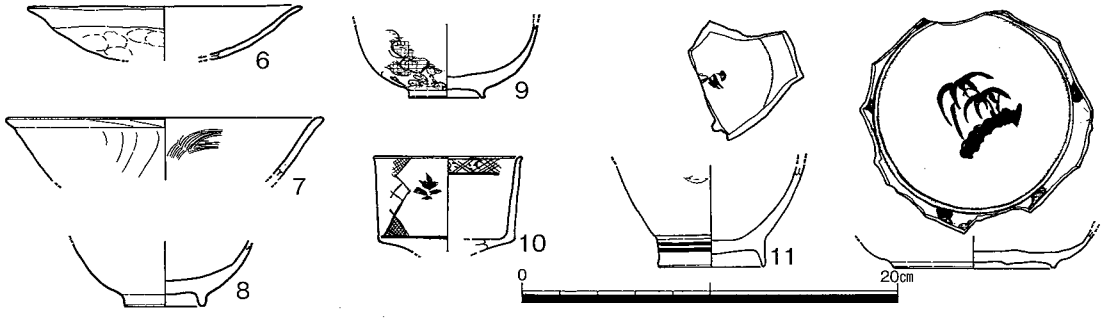


図16　I区遺物包含層第4層（６～９）、第3層（10～12）出土土器

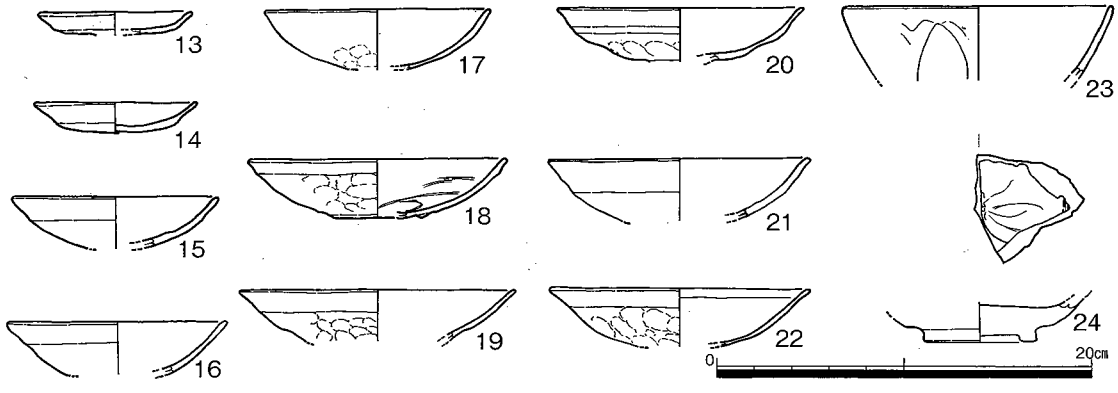


図17　SX-232（15）、SX-465（19）、SX-478（20、21、23）、SX-482（22）SX-500（13、24）、SX-515（14）、SX-518（16～18）出土土器

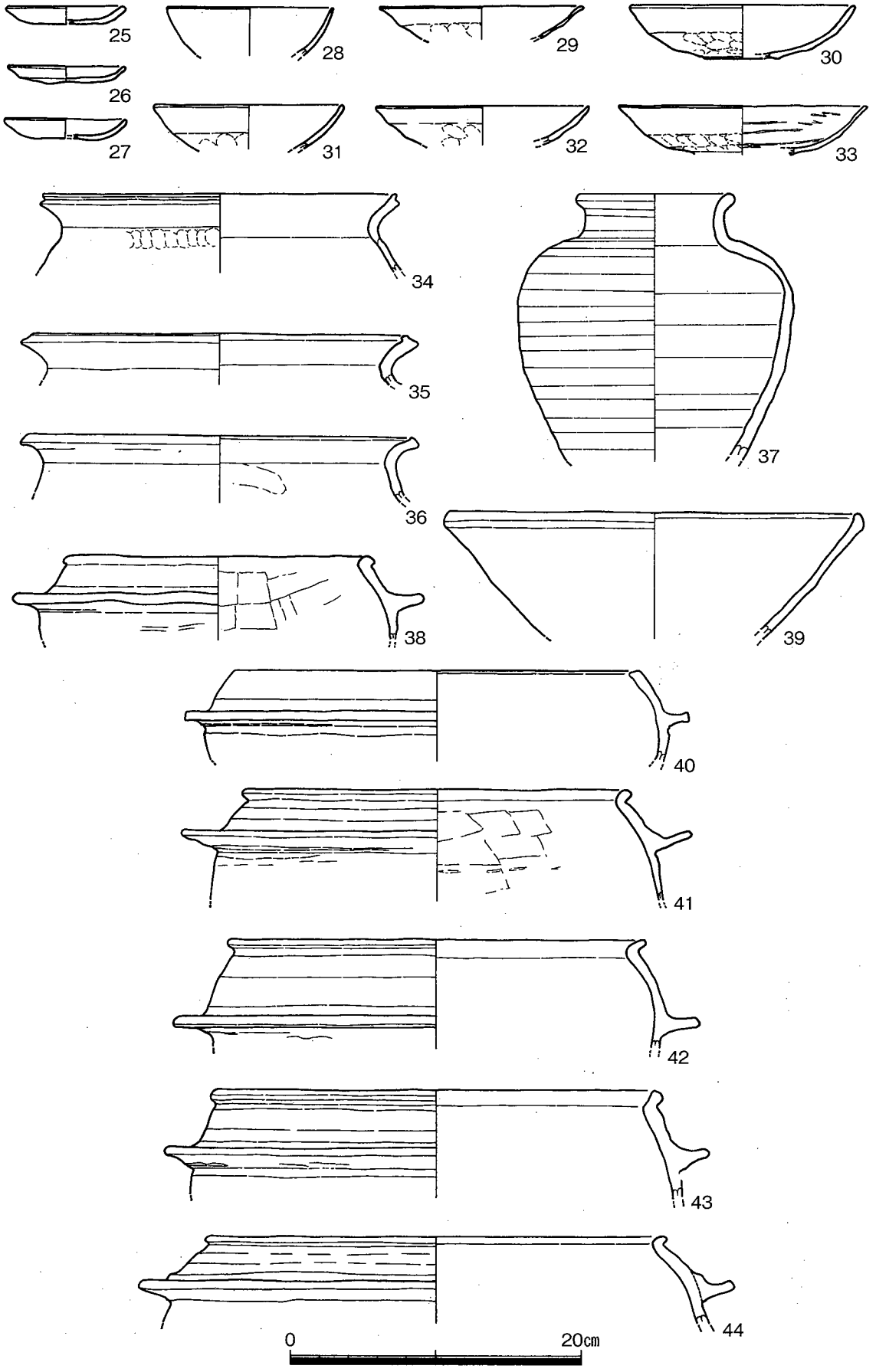


図18　SD－503（25～44）出土土器

第２区

ＳＸ－２３２

15 は復元口径 10.8cm の瓦器椀である。

ＳＸ－４６５

19 は復元口径 14.4cm の瓦器椀である。

ＳＸ－４７８

20 は復元口径 13.1cm の土師器小皿である。外面底部に指押さえを施す。21 は復元口径 13.8cm の瓦器椀である。23 は復元口径 14.2cm の青磁碗である。外面に鎬蓮弁文を施す。

ＳＸ－４８２

22 は復元口径 13.6cm の瓦器椀である。外面に指押さえを施す。

ＳＸ－５００

13 は復元口径 7.8cm の土師器小皿である。24 は復元高台径 6.0cm の青磁碗である。内面見込み部に工具で文様を施す。

ＳＤ－５１５

14 は口径 8.4cm、器高 1.7cm の瓦器小皿である。

ＳＸ－５１８

16 ～ 18 は瓦器椀である。16 は復元口径 11.5cm である。17 は復元口径 11.8cm で外面に指押さえを施す。18 は口径 13.6cm、器高 3.1cm である。外面に指押さえ、内面にミガキを施す。貼付け高台で断面は三角形である。

ＳＤ－５０３

25 ～ 27 は土師器小皿である。25 は口径 7.8cm、器高 1.3cm である。26 は口径 7.9cm、器高 1.3cm である。27 は復元口径 8.2cm、器高 1.4cm である。

28 ～ 33 は瓦器椀である。28 は復元口径 11.2cm である。29 は復元口径 13.8cm で、外面を指押さえ、口縁部を指ナデで仕上げる。30 は復元口径 15.4cm、器高 3.7cm である。外面を指押さえ、口縁部を指ナデで仕上げる。高台は貼付けであるが退化が進んでおり、13 世紀前半に位置づけられる。31 は復元口径 12.9cm で、外面を指押さえ、口縁部を指ナデで仕上げる。32 は、復元口径 14.6cm で、外面に指押さえ、口縁部を指ナデで仕上げる。33 は復元口径 17.6cm で、外面を指押さえ、口縁部を指ナデで仕上げる。内面はミガキを施す。

34 ～ 36 は土師質甕である。34 は復元口径 24.2cm である。頸部は、くの字状で接合痕を有し、外面には指押さえを施す。35 は復元口径 25.6cm である。36 は復元口径 26.4cm である。内面頸部付近に工具痕が残る。

37 は須恵器壺で、口径 10.4cm である。39 は瓦質こね鉢で、復元口径 28.0cm である。

38、40 ～ 44 は土師質羽釜である。38 は復元口径 20.2cm である。外面鍔部下はケズリを施し、内面に工具痕が残る。40 は復元口径 27.8cm である。41 は復元口径 25.8cm である。外面鍔部下はケズリを施し、内面に工具痕が残る。42 は復元口径 28.4cm である。43 は復元口径 30.0cm である。44 は復元口径 30.8cm である。

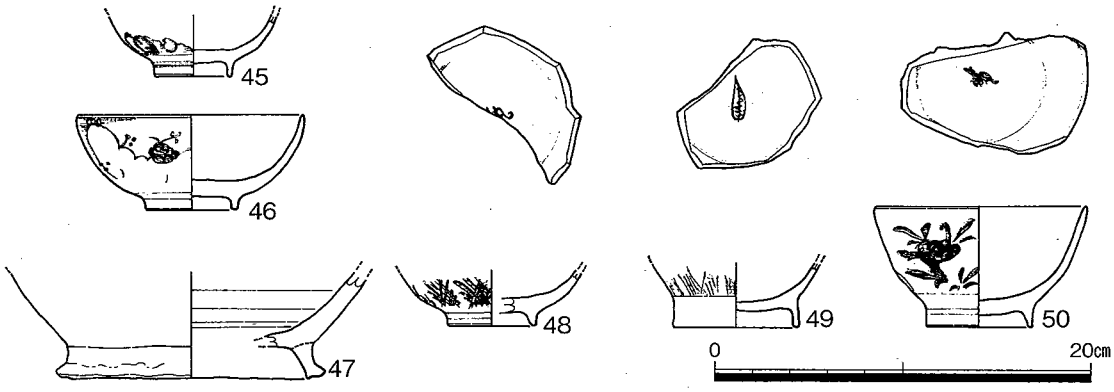


図19　SD－98（45～50）出土土器

ＳＤ－９８

45、46、48～50は磁器染付けである。45は高台径4.0cmの丸碗である。外面に文様を描く。46は復元口径13.9cm、器高5.0cmの丸碗である。外面に梅花文を描く。48は復元高台径4.0cmの丸碗である。外面・内面見込み部に文様を描く。49は復元高台径6.5cmの広東碗である。外面に草花文、内面見込み部に木の葉、一葉を描く。50は復元口径11.2cm、器高6.3cmの碗である。外面に果実文、高台部に横線2条、内面見込み部に文様を描く。44は復元高台径12.4cmの土師質土器である。

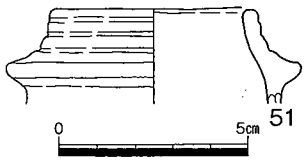


図20　ミニチュア羽釜（51）

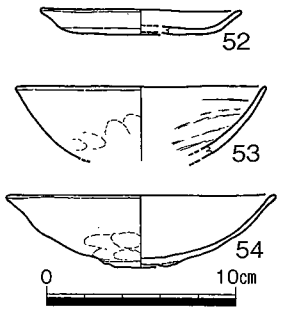


図21　Pit－196（52）、Pit－459（53）、Pit－523（54）出土土器

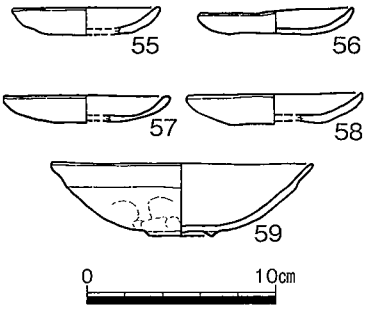


図22　Pit－432出土土器（55～59）

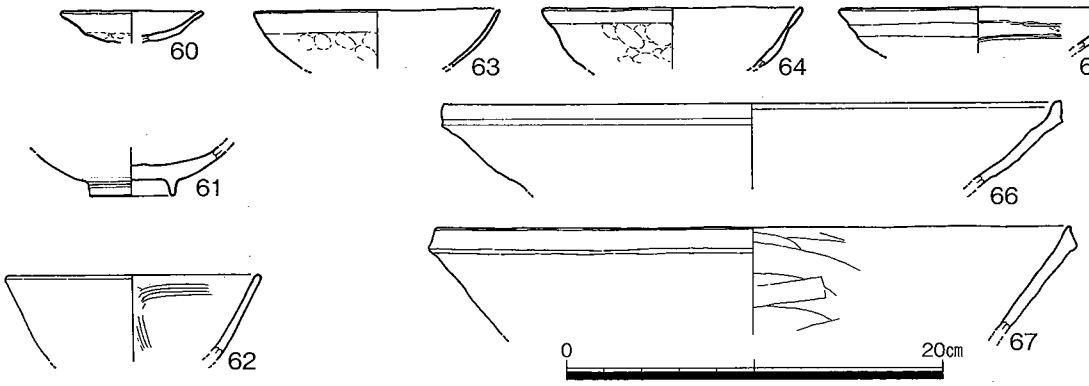


図23　Ⅱ区遺物包含層第4層（60～67）出土土器

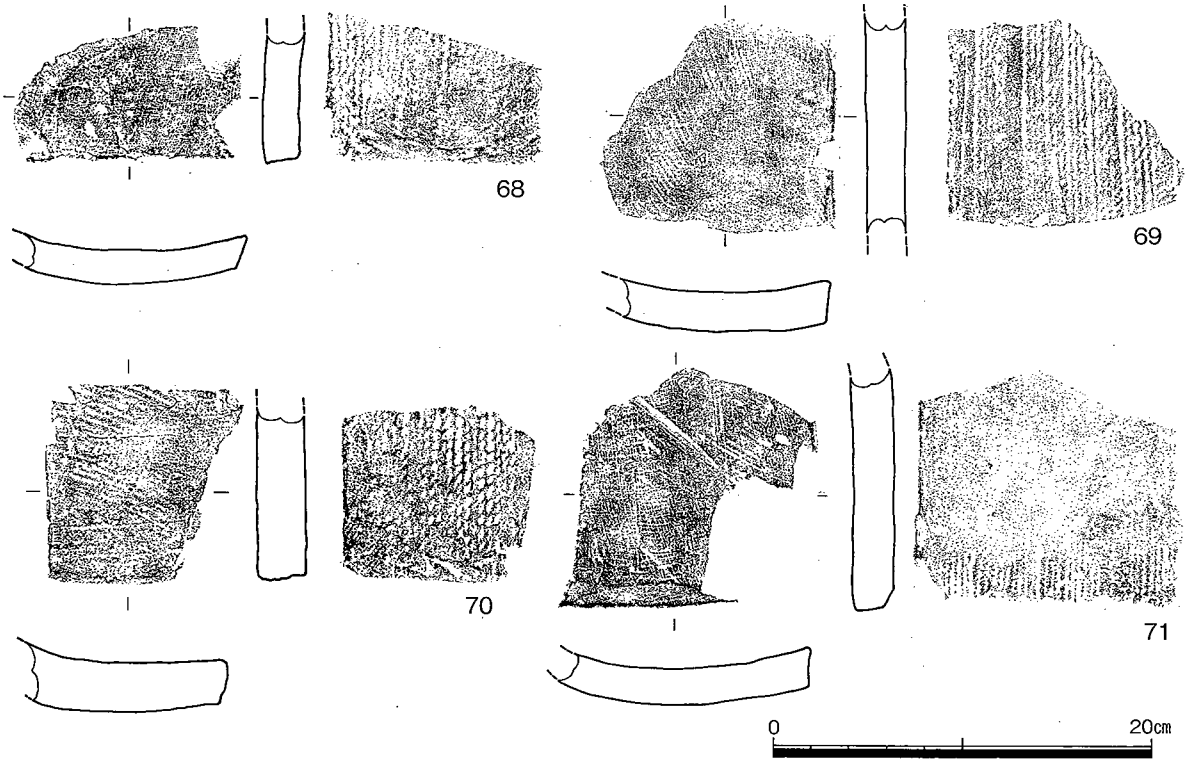


図24　遺物包含層第3層出土平瓦（68～71）

ミニチュア瓦質羽釜

51は復元口径5.2cmのミニチュア瓦質羽釜である。遺物包含層第4層から出土している。従前の調査においてミニチュア瓦質羽釜が1点出土している。復元口径7cmで口縁部から鍔部にかけてが短く、今回の調査で出土したものは口径が小さく、口縁部から鍔部にかけてが長く羽釜の形状を忠実にミニチュア化したものである。なんらかの祭祀に用いられたものと考えられる。

Ｐｉｔ－１９６

52は復元口径10.4cm、器高1.3cmの土師器小皿である。

Ｐｉｔ－４５９

53は復元口径13.0cmの瓦器椀である。外面に指押さえ、内面にミガキを施す。

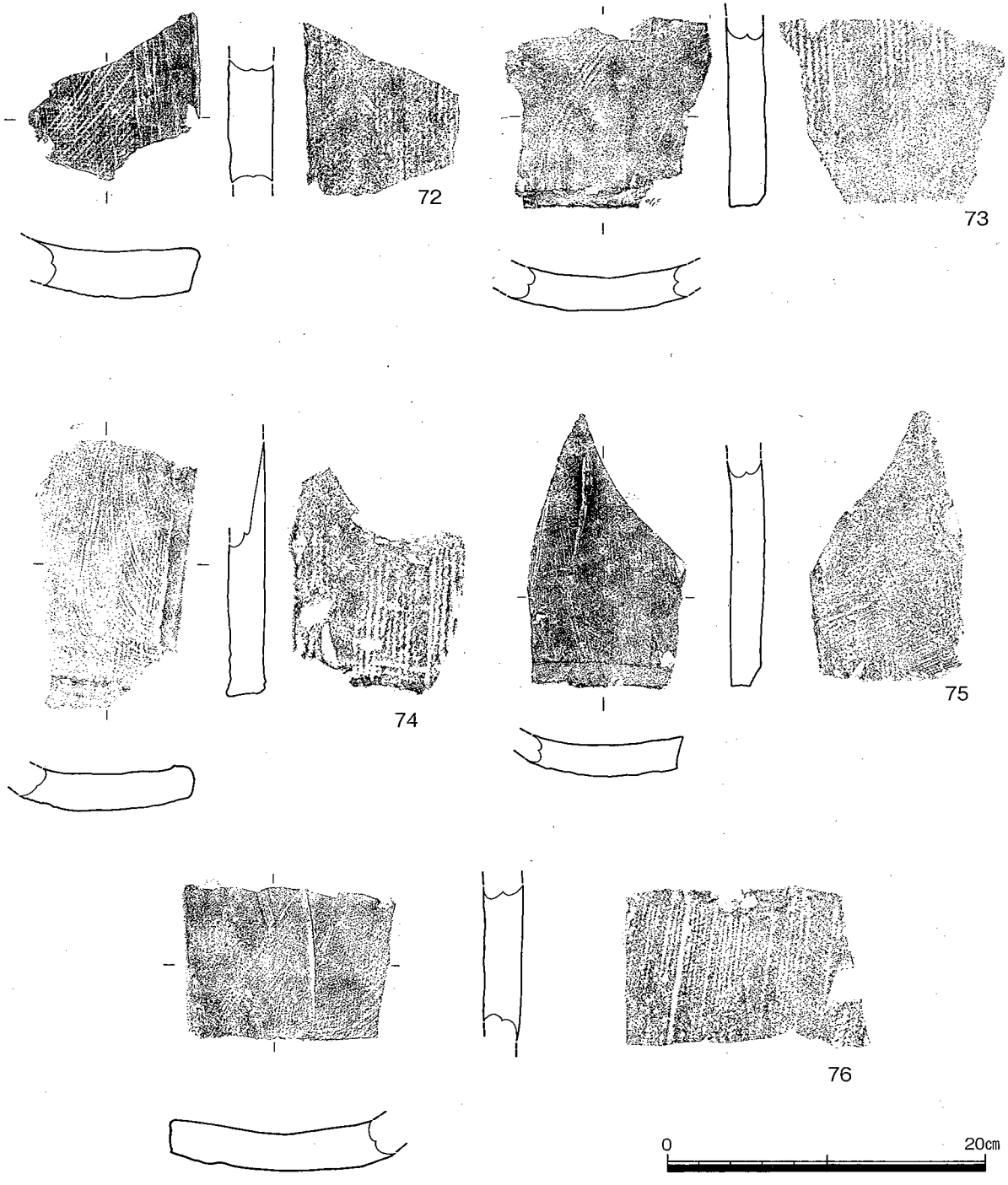


図25　SX－465（76）、SX－478（72）、SD－503（73、74）、Pit－525（75）出土平瓦

Ｐｉｔ－５２３

54 は口径 14.0cm、器高 3.9cm の瓦器椀である。外面に指押さえを施す。高台は貼付けで、退化がすすむ。時期は 13 世紀前半に位置付けられる。

Ｐｉｔ－４３２

55 ～ 58 は土師器小皿である。55 は復元口径 7.6cm、復元器高 1.4cm である。56 は口径 8.0cm、器高 1.4cm である。57 は復元口径 8.8cm、復元器高 1.4cm である。58 は復元口径 9.0cm、復元器高 1.6cm である。59 は口径 13.8cm、器高 3.8cm の瓦器椀である。外面に指オサエを施す。高台は貼付けで断面は三角形である。柱穴内の柱根の周囲から出土しており、地鎮を行った器と考えられる。

遺物包含層第４層

60 ～ 65 は瓦器である。60 は復元口径 7.4cm、復元器高 1.7cm の小皿である。61 は復元口径 13.0cm の椀である。外面に指押さえを施す。62 は復元口径 13.6cm の椀である。外面に指押さえを施す。63 は復元口径 14.6cm である。内面にミガキを施す。　64 は復元高台径 4.5cm の磁器染付け碗である。65 は復元口径 13.2cm の青磁碗である。内面に櫛描文を施す。66、67 は瓦質こね鉢である。66 は復元口径 32.7cm で口縁部は断面三角形である。67 は復元口径 33.6cm で内面にヘラ削りを施す。口縁部は断面三角形である。

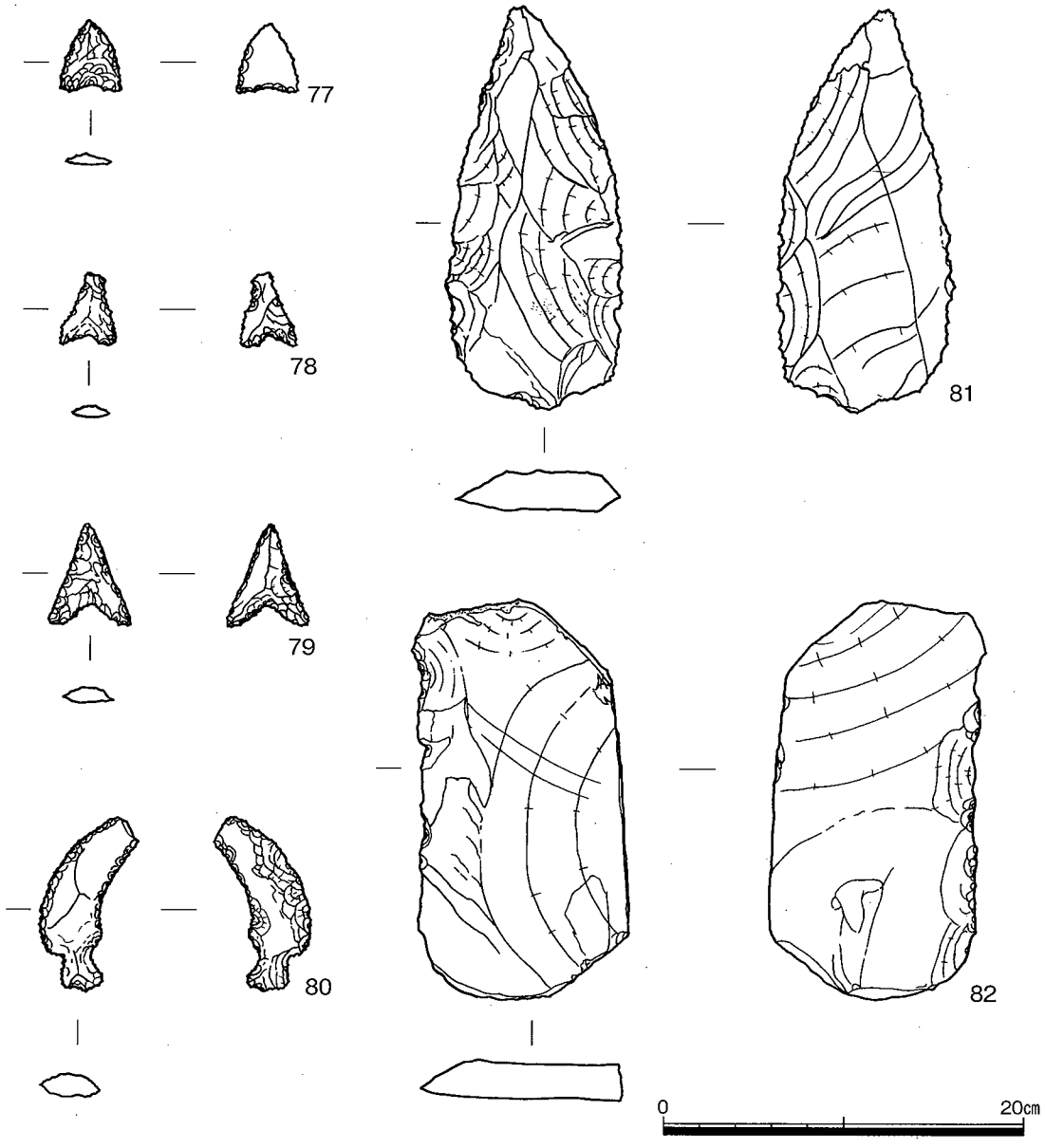


図26　SD－69 (79) 、Pit－476 (81、82) 、遺物包含層第4層 (77、78) 、表採 (80) 出土石器

平瓦

出土瓦は、軒丸、軒平瓦は出土しておらず、平瓦のみである。出土瓦の調整は、凹面に凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施すものがほとんどである。焼成は良好で硬く焼き締まる。時期は調整から判断して13世紀代と考えられ、周辺の瓦窯としては、加治・神前・畠中瓦窯が同時期のものである。

68～71は遺物包含層第3層出土の平瓦である。68は厚さ1.9cmで、凹面に布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。69は厚さ2.0cmで凹面に粘土切出し時の痕跡である斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。70は厚さ2.5cmで凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。71は厚さ2.2cmで凹面に粘土切出し時の痕跡である斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。
72は、ＳＸ－478出土で、厚さ2.8cm、凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。73、74はＳＤ－503出土である。73は厚さ2.2cm、凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。74は厚さ2.3cm、凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。75は、Pit－525出土で、厚さ2.0cm、凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。76は、SX－465出土で、厚さ2.3cm、凹面に斜め方向の糸引き痕、布目痕を有し、凸面に縄目叩きを施す。

石器

本調査地で出土した石器はサヌカイト製で、縄文～弥生時代にかけてのものと考えられる。77～79は石鏃である。77は遺物包含層第4層出土の長軸1.9cm、短軸1.7cm、厚さ0.3cmである。78は遺物包含層第4層出土の長軸2.0cm、短軸1.5cm、厚さ0.3cmである。79はSD－69出土の長軸2.8cm、短軸2.3cm、厚さ0.4cmである。80は石匙である。縦長のもので、刃はしの字状に曲がる。残存長4.9cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmである。平成3年度調査において、自然流路内より横長の石匙が出土している。

81、82はPit－476出土の石槍未成品である。土坑内に本石器が2点重なる状態で出土している。81は長軸11.2cm、短軸4.9cm、厚さ1.1cmである。木の葉形の状態まで加工しているが、刃部の整形を失敗し、薄く仕上げることができなかったものと考えられる。82は、長軸11.1cm、短軸5.5cm、厚さ1cmである。石材から割り取った状態である。平成3年度調査においても同様の石器が出土しており、本調査地で石器の加工を行っていたことが考えられる。

参考文献

「新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要」貝塚市埋蔵文化財調査報告　第25集　貝塚市教育委員会　1993.3

第４章　まとめ

工場基礎等による破壊部分が存在するものの第１区、第２区ともに良好に遺構を検出することができた。以下、各時代の状況についてまとめることにする。

中世以前

従前の調査、今回の調査でも、河川あるいは流路が確認された。特に第１区は、西側方向に地形が傾斜する地点に位置し、旧流路部分では湧水を確認し、従前の調査では、自然流路内、遺物包含層から縄文時代、弥生時代の石器が出土しており、今回の調査でも石器が出土している。石器の中には、製作途中で破棄されたと考えられるものが出土しており、本調査地で、石器の加工を行なっていた可能性がある。本遺跡では遺物の出土のみで、集落跡の発見にはいたっていないが、東南方向には麻生中下代遺跡、石才南遺跡といった弥生時代の集落跡が存在しており弥生時代の集落の一部が確認される可能性がある。

中世

従前の調査では、中世以降、河川あるいは流路が埋没し、湿地化した場所に、地形改変を行ない田畑に変えていったことが明らかとなっている。出土遺物から周辺部で集落跡の推定をしていたが、今回の調査（第２区部分）で掘立柱建物３棟を検出した。掘立柱建物の２棟は近接しており、柱穴内から出土した土器も同時代であることから、同時に存在した可能性がある。建物の周囲から溝を検出しており、近くには区画溝と考えられるＳＤ－５０３を検出した。溝内からは羽釜、瓦器椀、こね鉢などの土器が出土しており集落の一部と考えられる建物を検出している。地盤は西北方向に傾斜しており、調査区南側に集落域が広がることが予想される。
調査区南側から出土している瓦は、中世のものであり、寺院等の建物に使用されたものと考えられる。軒丸、軒平瓦は出土しておらず、出土点数から判断して、今回の調査で発見した建物に使用されたものとは考えられないが、周辺に寺院等の建物が存在した可能性がある。

また、出土遺物で注目するべき遺物として、ミニチュア羽釜があげられる。市内では、本遺跡のみの出土であり、平成２年度の発掘調査にて出土したものに続く２点目の出土となった。何らかの祭祀にかかわる遺物として注目されるもので、他地域での出土例も踏まえて検討する必要がある。

近世

近世には、中世期に湿地状で耕作には適さなかった場所を新たに改変し、灌漑用水路、池等がつくられて耕作地となったと考えられる。出土した近世の遺物のほとんどは灌漑用水路（ＳＤ－９８）からの出土であり、本調査地は田畑が広がる地域であったと考えられる。中世の集落域は、現在の集落に移動、固定したと考えられ、耕作地となったと考えられる。

耕作に伴い、灌漑用水路の他に、池（池２～池４）、井戸（SE － 331）が造られたのもこの時期である。池は、湧水のある地点で掘削されており、水路の水量の減る夏場等の水を得るために掘削されたものと考えられる。

近代

ユニチカ貝塚工場が誘致建設されるまで本調査地周辺は耕作地であったと考えられる。昭和９年（1934 年）７月に「大日本紡績株式会社（ユニチカ株式会社）」、「南海電気鉄道株式会社・阪和電気鉄道株式会社」と貝塚町の間で契約を結んだ。54,000 坪（約 178,200㎡）の買収譲渡、道路・水路等の撤去新設は貝塚町が行ない、阪和電気鉄道株式会社に工場近接に駅（現 JR 東貝塚駅）を設置し、工場内に引込線を新設する条件を貝塚町が履行することで、工場建設は実施された。造成工事は大規模で広範囲なものとなり、高い地盤を削り取り整地し造成した。地盤の悪い部分については暗渠排水を設置し、地盤の低い場所では造成時に２ｍ以上の盛土を行い、整地

を行なっている。紡績機械は重量があり、設置するには頑強な基礎を設置する必要があり、造成時から平成９年の操業停止まで機械設置基礎部分は何度も見直し工事がされていたと考えられる。工場基礎は古い部分ではレンガ積みのものがあり、地下に設置されていた通風孔はレンガ積みのものが残されていた。また、紡績工場敷地内は厳重に火気の取扱いが規制されており、喫煙場所の徹底がはかられていた。工場敷地内には地下防火水槽（図版表紙）、防火池が設けられており、工場内には消火栓も設置されていた。今回の調査地は工場内に設けられたグラウンド部分と工場部分であり、グラウンド周辺には、工場のほかに事務所、従業員の宿舎、学校などがあった。工場造成後、工場の敷地は 49,579 坪（約 163,600㎡）におよび本工場が日本の近代産業の一翼を担ったことはいうまでもない。

時代は流れ、工場の建物は解体され、東洋の魔女を輩出した体育館も、工場跡地再開発で取り壊された。今回の調査では、埋蔵文化財の発掘調査とともに貝塚の近代化のシンボルである貝塚工場の造成・建設から再開発までの変遷も見ることになった。現在、本調査後に店舗が建設され、工場跡地の一部では住宅の開発がはじまっている。

報告書抄録	
ふりがな	にいとばきたいせきはっくつちょうさがいよう
書名	新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要２
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第68集
編著者名	三浦　基
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１-17-１　TEL 072-423-2151
発行年月日	西暦2007年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 はんだ 半田	27208	84	34度 25分	135度 20分	2003 0407～ 2003 1020	12,600	店舗 建設

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にいとばきたいせき 新井・鳥羽北遺跡	集落跡	中世 近世	掘立柱建物 柱穴、溝、土坑	須恵器 瓦器 土師器 陶磁器	

図　　版

写真１　第２区　全景

図版1　検出遺構　第1区

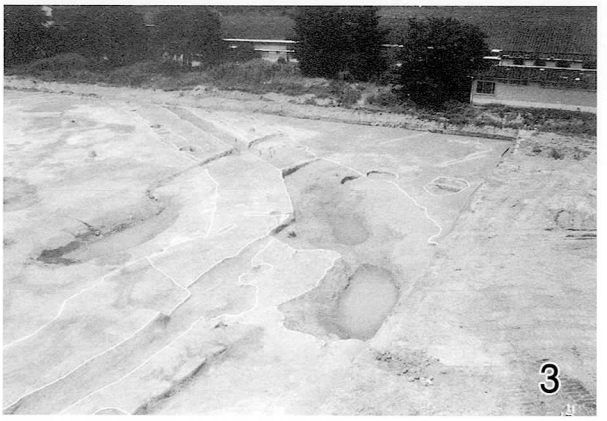
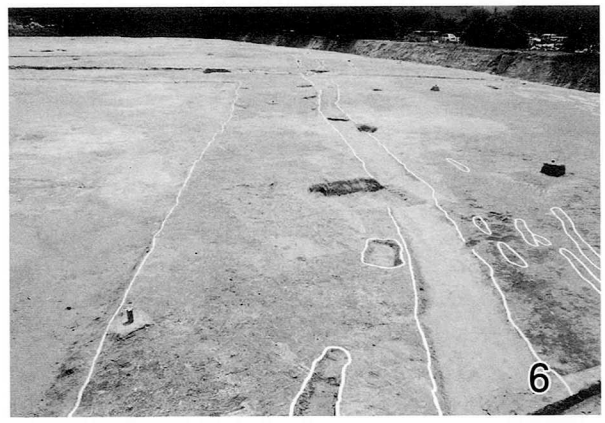
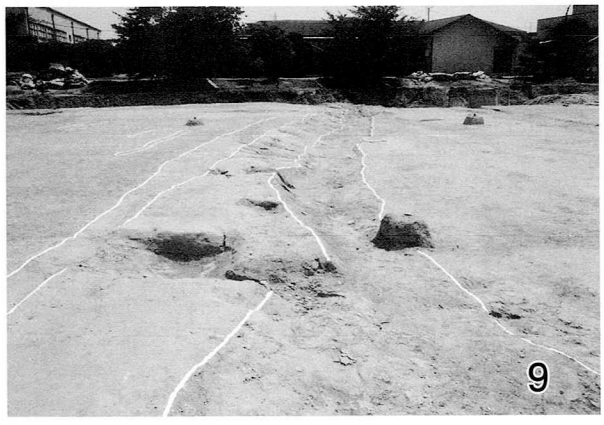
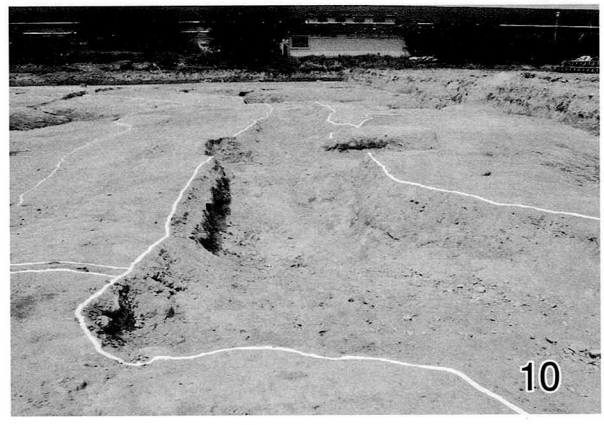


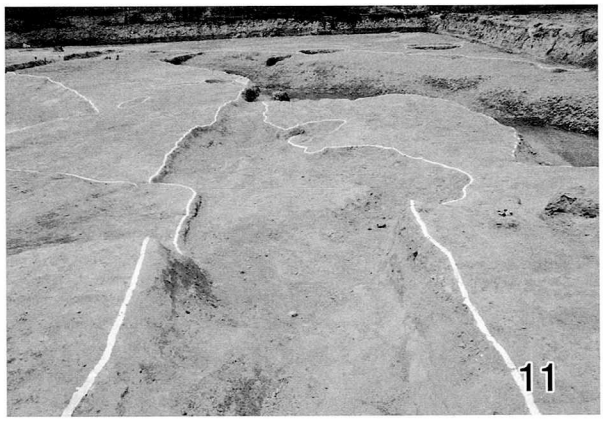
写真２：第１区全景、写真３：SD-106、写真４：池２

図版2　検出遺構　第2区









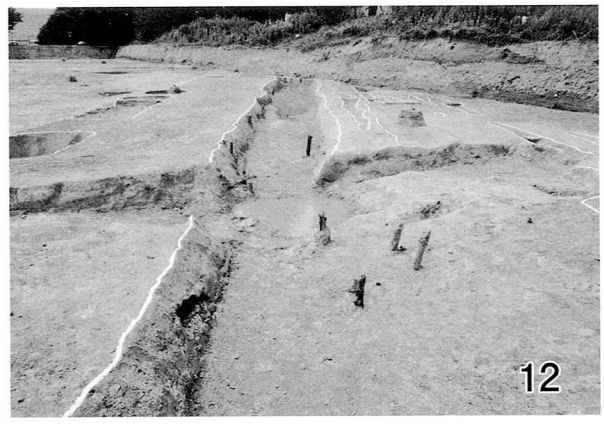
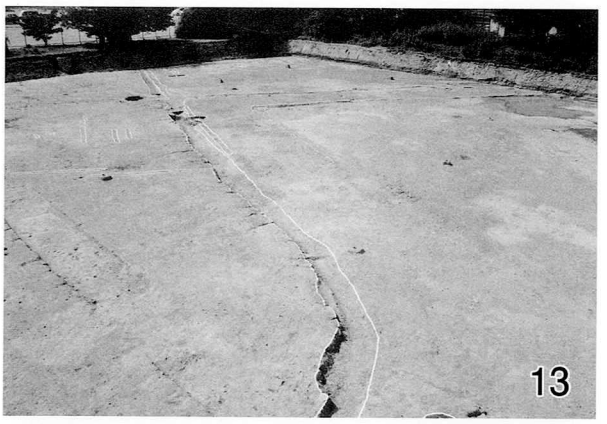
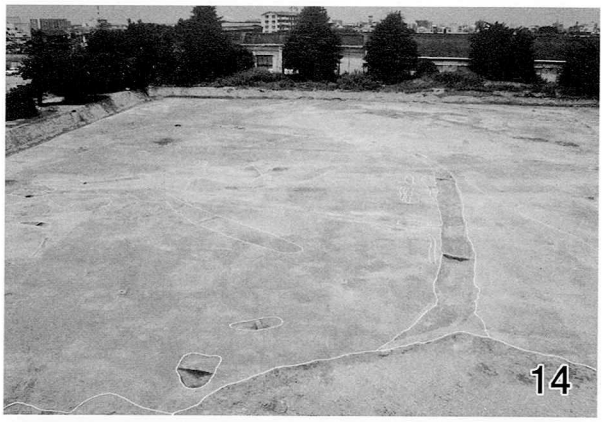
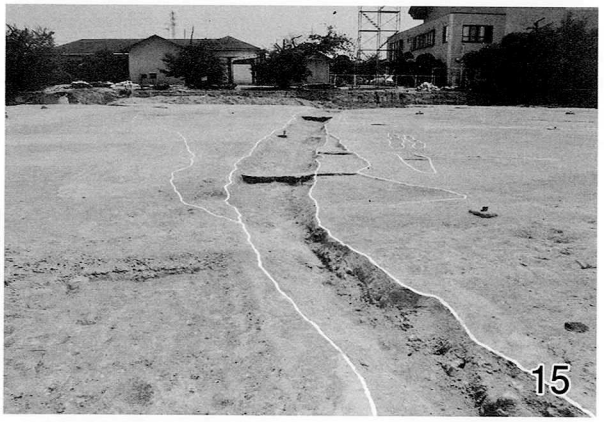


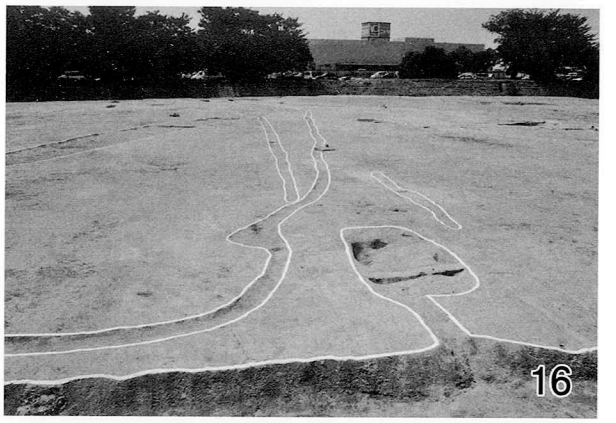
写真5・6：池1堤、写真7：鋤溝、写真8：SD-73・74、写真9：SD-96、写真10・11：SD-98、写真12：SD-106

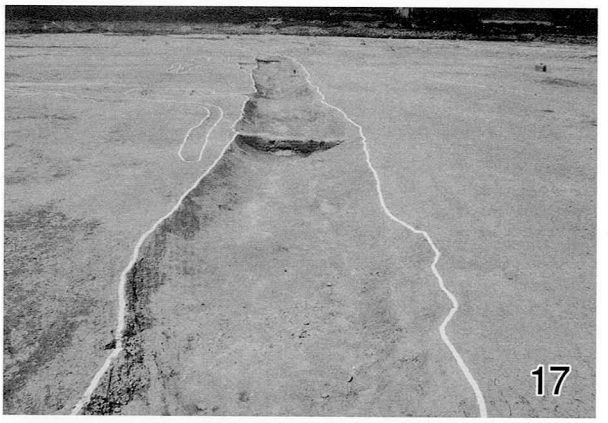
図版3　検出遺構　第1区

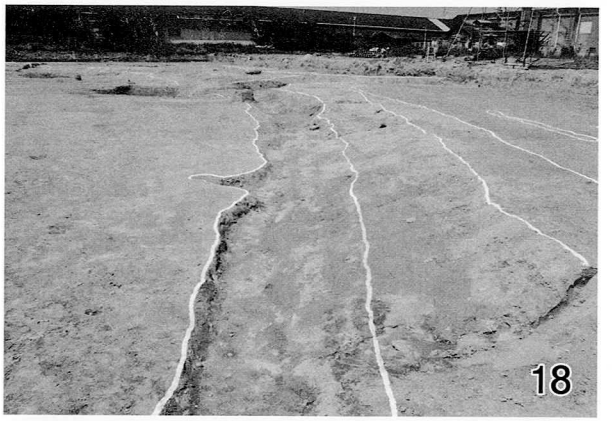












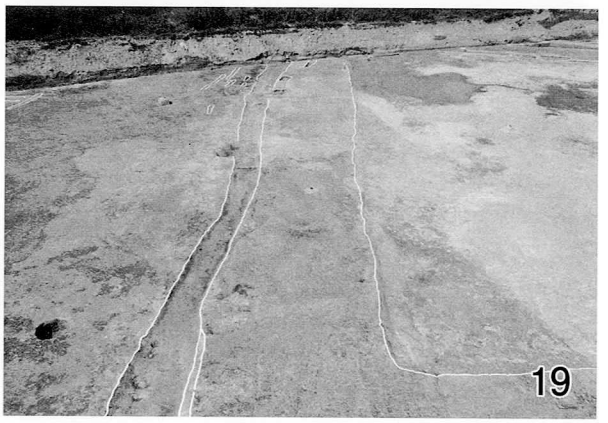
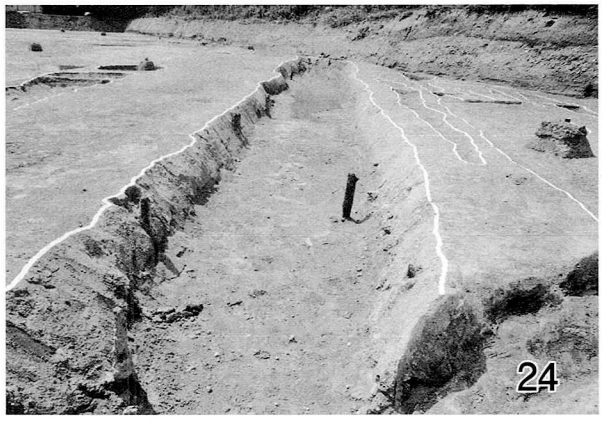
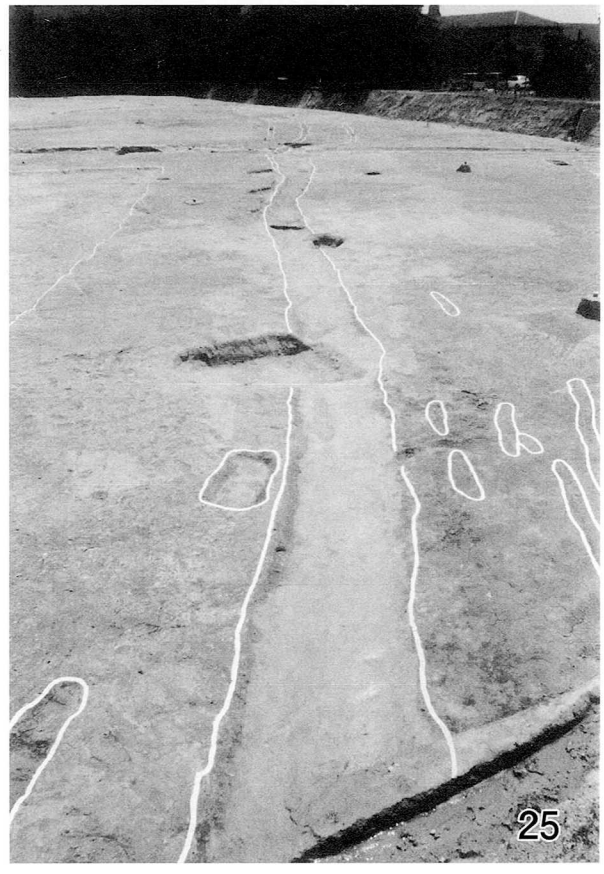


写真13～15：SD-41、写真16：SD-30、SD-31、SD-95、写真17：SD-41、写真18：SD-96
写真19：SD-92、池1堤、写真20：SD-41

図版4　検出遺構　第1区・第2区





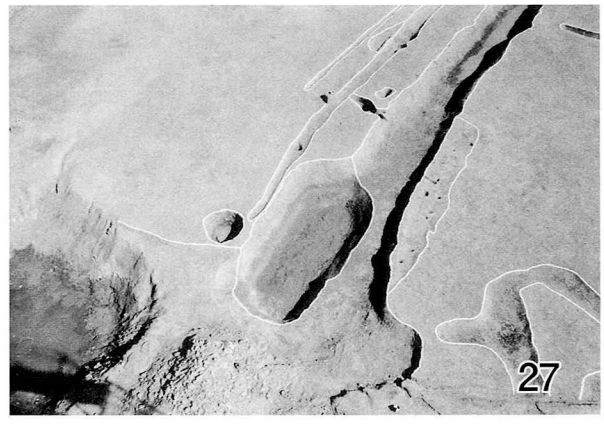
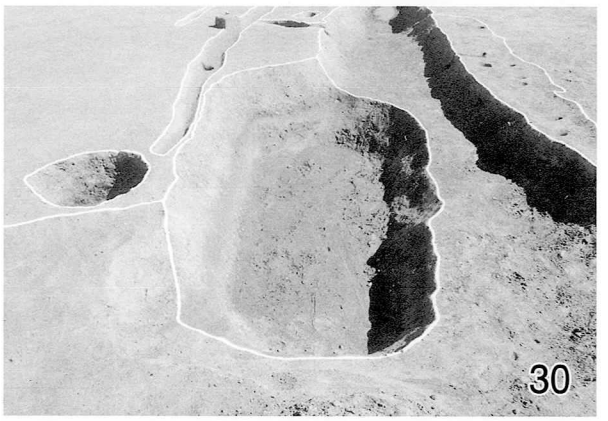
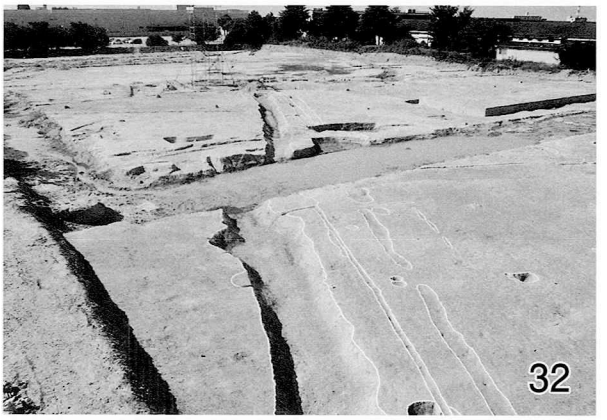


写真21～24：SD-106、写真25：SD-92、写真26・27：SD-98、SX-329

図版5　検出遺構　第2区





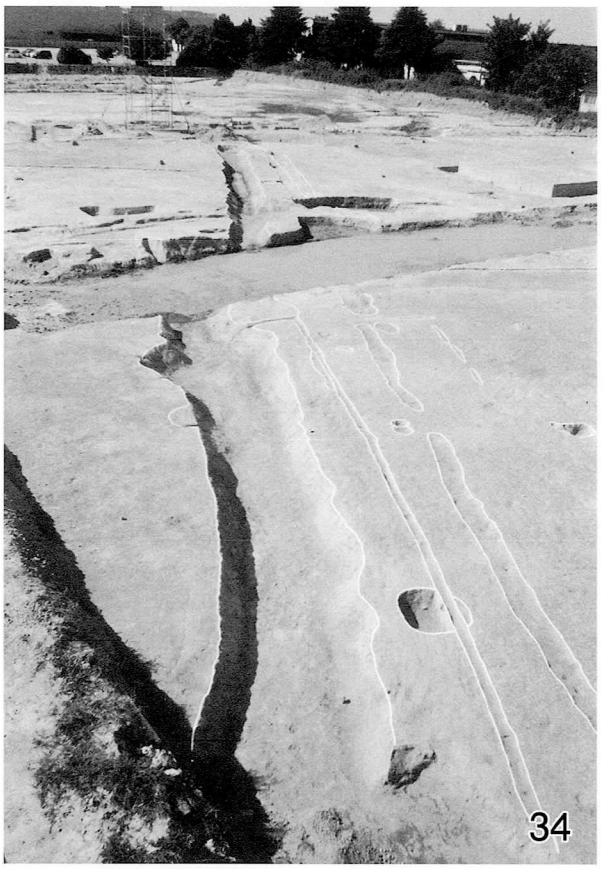
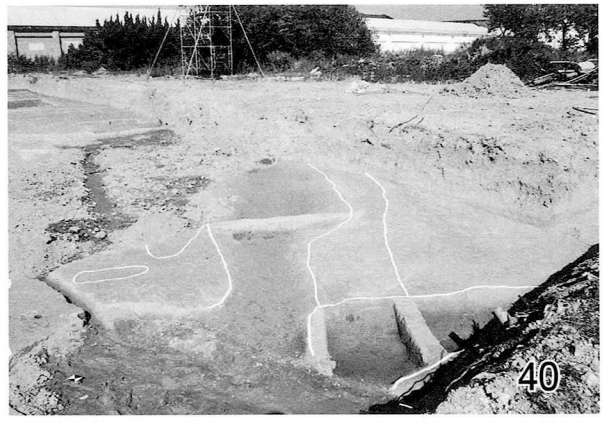


写真28・29：建物a、写真30：SX-329、写真31：SE-331、写真32～34：SD-98

図版6　検出遺構　第2区



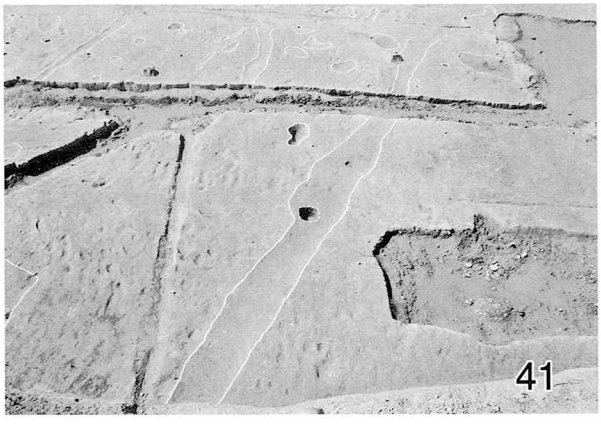


写真35・36：SD-164、SD-165、写真37：建物b・c、SD-503、写真38：鋤溝、
写真39・40：SD-503、写真41・42：SD-369

図版7　検出遺構　第2区

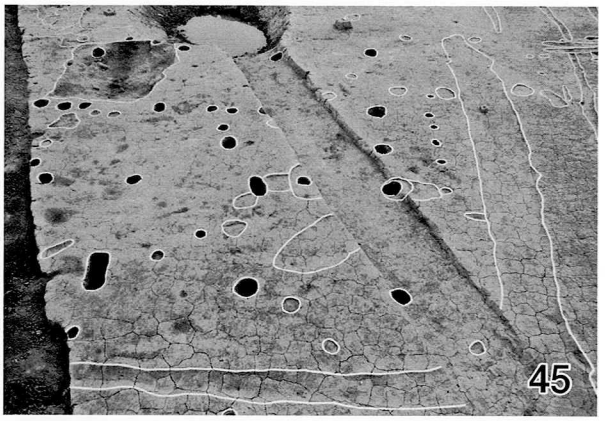
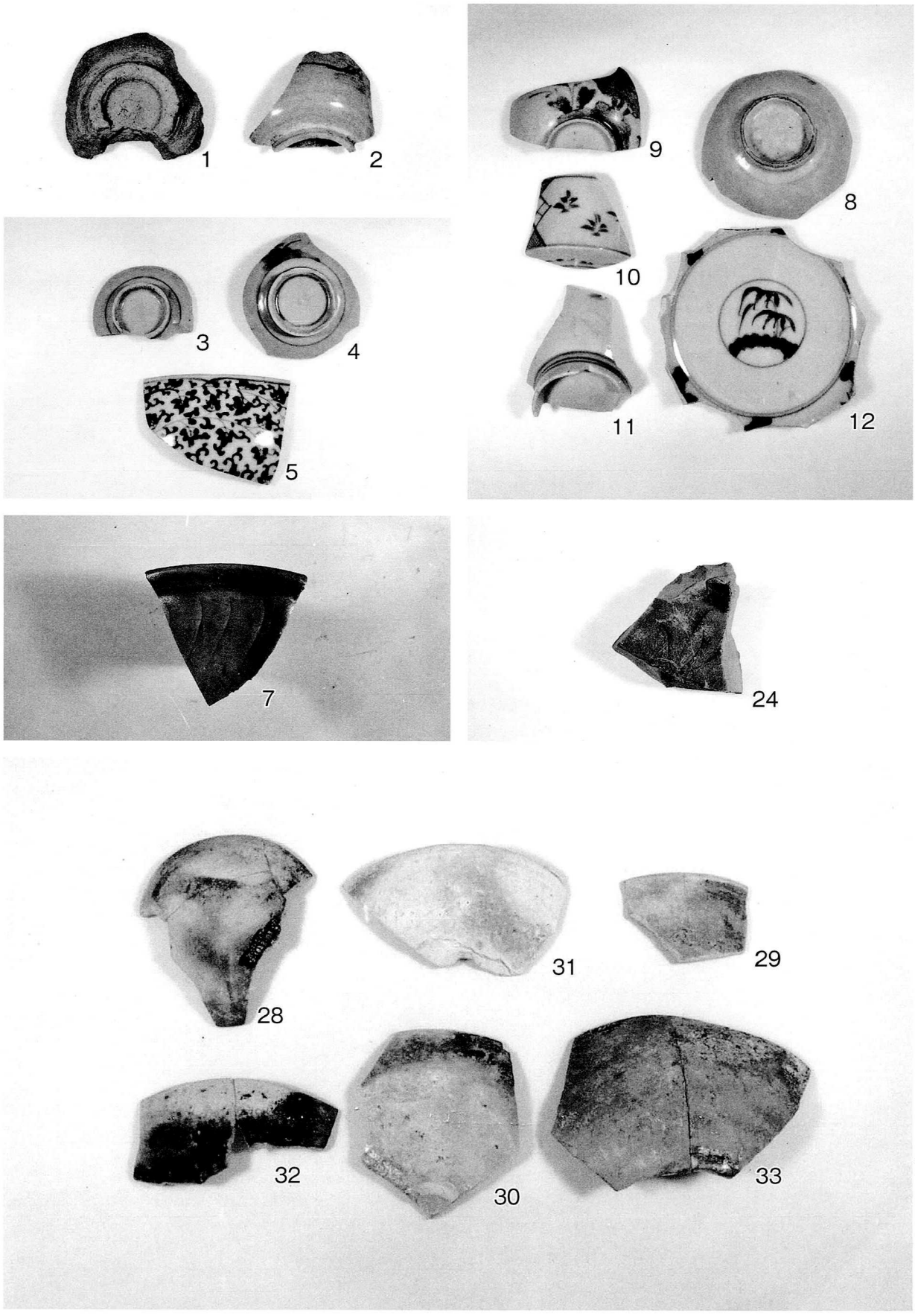
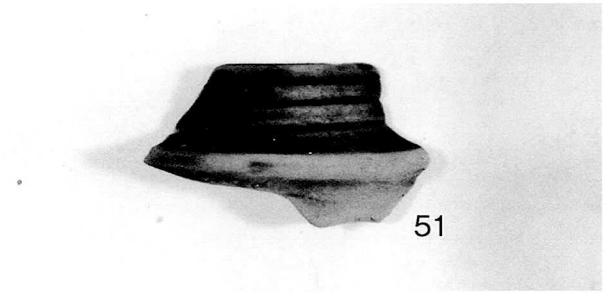


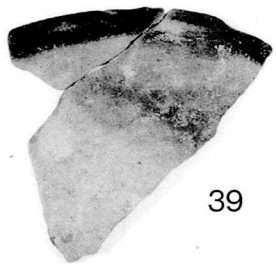
写真43：第２区東側、写真44・45：建物b、写真46・47：建物c

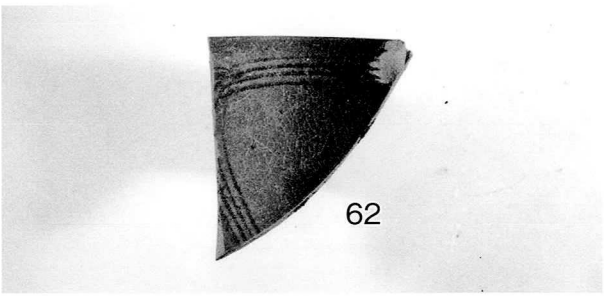


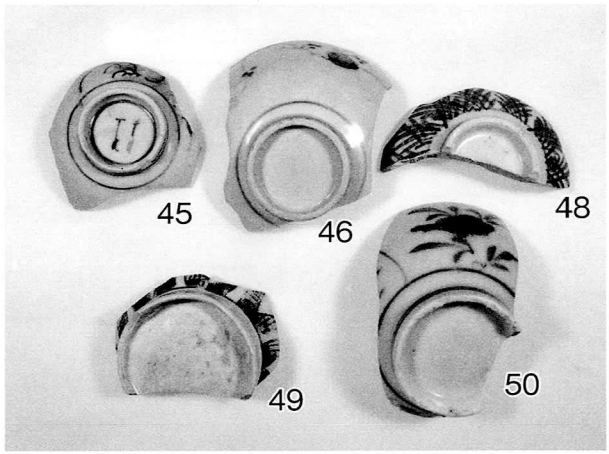
SX-27 (1～5)、遺物包含層第4層 (7～9)、第3層 (10～12)、SX-500 (24)、SD-503 (28～33) 出土土器

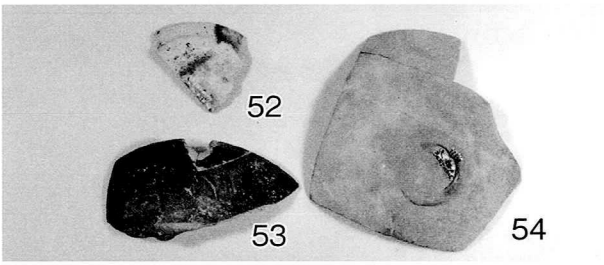
図版9　出土遺物

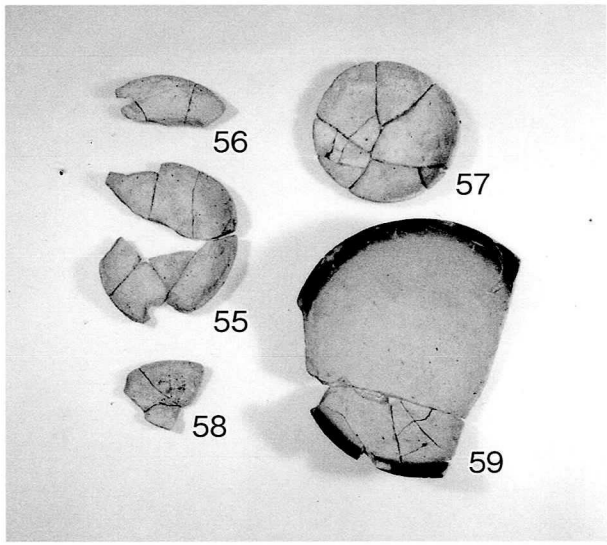


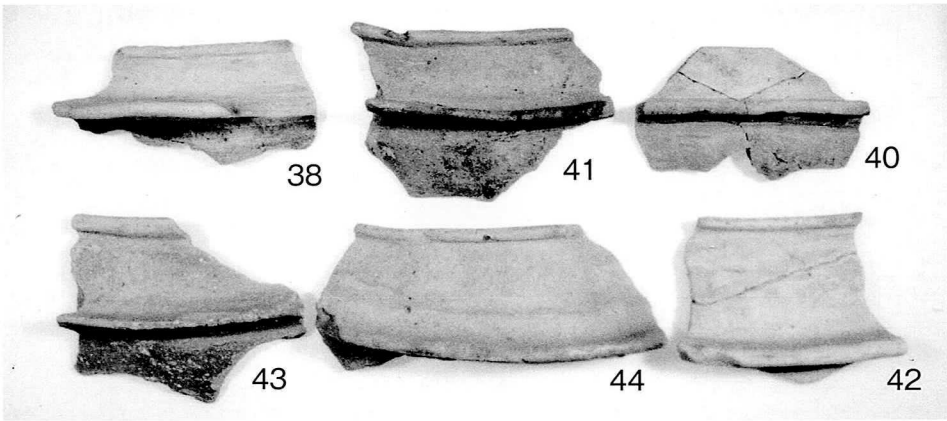




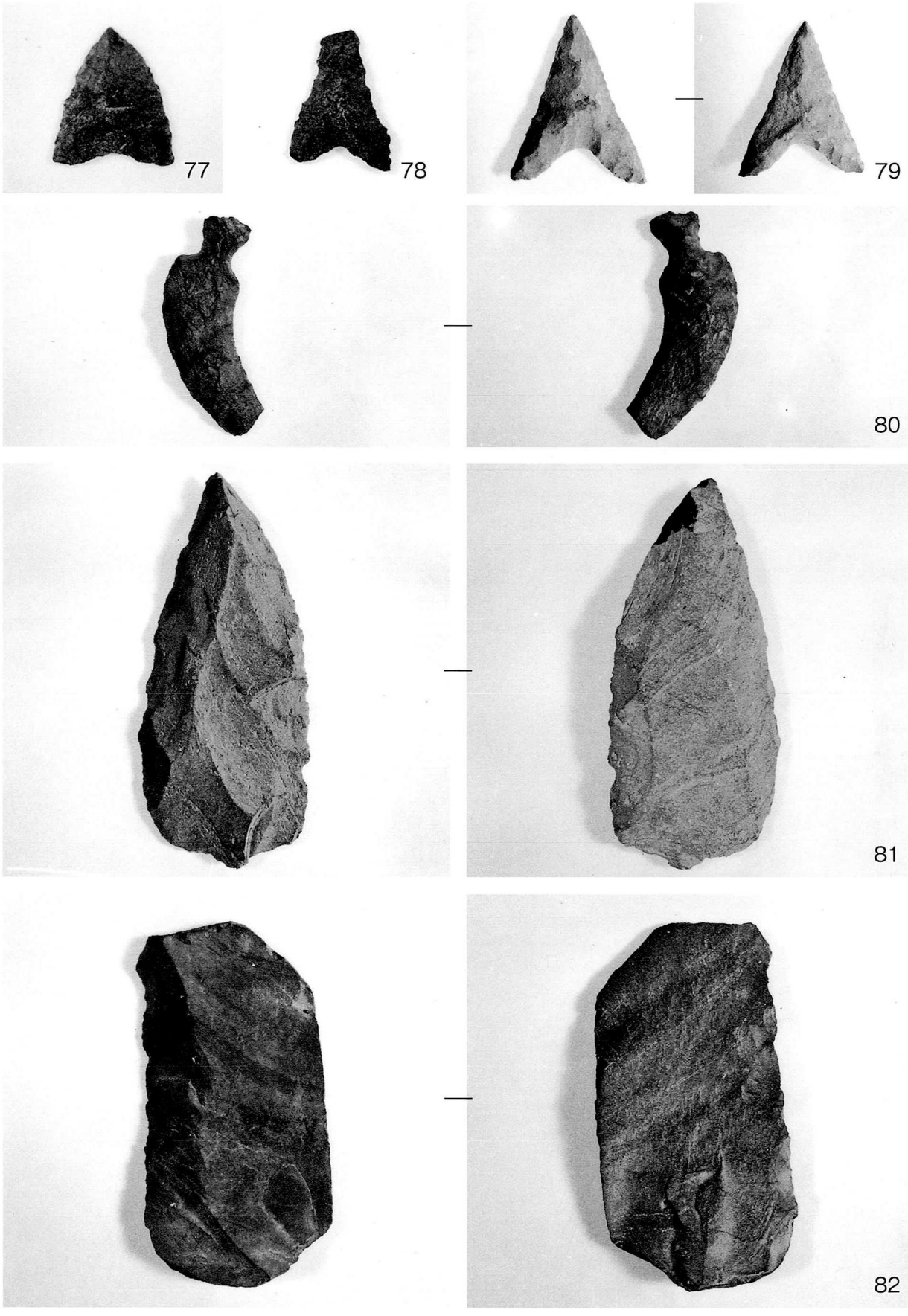








SD-503（37～44）、SD-98（45・46・48～50）、ミニチュア羽釜（51）、Pit-196（52）、Pit-459（53）、Pit-523（54）、Pit-432（55～59）出土土器



SD-69（79）、Pit-476（81・82）、遺物包含層第４層（77・78）、表採（80）出土土器

貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第68集

新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要2

発　行　日　　平成19年9月30日
編集・発行　　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号
印　　刷　　摂河泉文庫